



HITOTSUBASHI
UNIVERSITY

平成19年度
一橋大学学生生活実態調査報告書

一橋大学 学生委員会

ま え が き

平成 19 年度に本学で実施した「学生生活実態調査」の結果をとりまとめた報告書をお届けします。

全学規模で行われる「学生生活実態調査」は、平成 17 年度に引き続き、今回で 2 回目になりますが、平成 17 年度は、学部生のみを対象としていたのに対して、今回は大学院生も対象としました。

この「学生生活実態調査」は、継続的に蓄積されていく統計的なデータをもとに、本学学生の生活状況を把握することにより、今後の学生支援のあり方を具体的に検討し、更なる支援の充実に資することを目的に実施するものです。今後も原則として隔年で実施していく予定です。

調査の趣旨を理解して回答に協力していただいた学生の皆さんに感謝します。

平成21年3月
一橋大学 学生委員会委員長
盛 誠吾



目次

CONTENTS

調査に協力してくれた学生たち	P.2
I 回答学生について	P.2
II 家庭の状況について	P.4
III 生活費の状況について	P.8
IV 通学・住居について	P.11
V 経済支援について	P.13
VI アルバイトについて	P.15
VII 進路・就職について	P.19
VIII 生活支援について	P.22
IX 入学について	P.24
X 学生生活について	P.26
XI 大学への要望等について	P.28

I 回答学生について



II 家庭の状況について



III 生活費の状況について



IV 通学・住居について



V 経済支援について



VI アルバイトについて



VII 進路・就職について



VIII 生活支援について



IX 入学について



X 学生生活について



XI 大学への要望等について



調査に協力してくれた学生たち

一橋大学の学部と大学院に在籍する学生(休学・留学中を除く)を対象に、学生生活の実態を把握し、今後の学生支援のあり方を検討し、一層の改善と発展を目指すべく、平成19年11月から12月にかけて、『平成19年度学生生活実態調査』を実施しました。前回(平成17年度)調査は学部生のみを対象にしておりましたが、今回の調査は大学院生にも対象を拡げ、特に進路・就職については学部生と大学院生に設問を分けています。ただし国際企業戦略研究科は調査対象に含まれていません。

学部生については対象学生4,407人中938人(回答率21.3%)から、大学院生については対象学生1,644人中474人(回答率28.8%)から回答が得られ、全体の回答率は23.3%で、前回調査(学部生のみで23.9%)とほぼ同水準でした。



I 回答学生について

回答した学生の特性は図表 I-1(学部生)および I-2(大学院生)に示されています。

学部生については、回答者の学部はほぼ均等に分布していますが、学年によって回答者数に違いがあり、回答者の約6割が1・2年生となっています。したがって、回答結果は1・2年生の実態や意見を3・4年生よりやや強く反映するものであると言えます。

回答者の65%が男性、35%が女性です。外国人留学生は3%未満です。現役合格者が約3分の2(66%)を占めます。出身高校の区分については、公立高校がほぼ半数(48%)、私立高校が約4割(41%)を占め、そのほとんどが中高一貫型です。

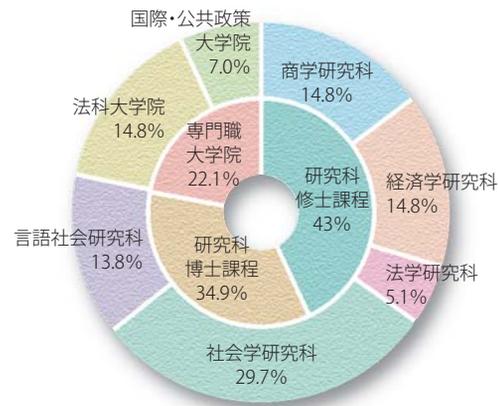
大学院生については、国際企業戦略研究科を除くすべての研究科と専門職大学院(法科大学院、国際・公共政策大学院)から回答が得られました。対象者の数が研究科等によって大きく異なるので、回答者の分布には偏りが見られます(社会学研究科30%に対して法学研究科5%など)。しかし、回答率には研究科等による大きな違いはないので、本調査の結果が本学の(国際企業戦略研究科を除く)大学院生の状況や意見を適切に反映していると考えて差し支えないでしょう。

回答学生について

図表 I-1 回答学生の構成(学部生)



図表 I-2 回答学生の構成(大学院生)



学年別に見ると、回答者のうち修士課程の学生が65%（うち専門職大学院の学生が22%）、博士課程の学生が35%を占めています。また、回答者のうち56%が男性、44%が女性であり、女性比率が学部生よりも高くなっています。外国人留学生の比率(15%)は、学部生と大きく異なります。出身大学等については、約2割が一橋大学出身、約6割が他大学出身で、約2割が社会人を経験していますが、社会人経験者のほとんどは他大学の卒業生です。



III

家庭の状況について

出身地について

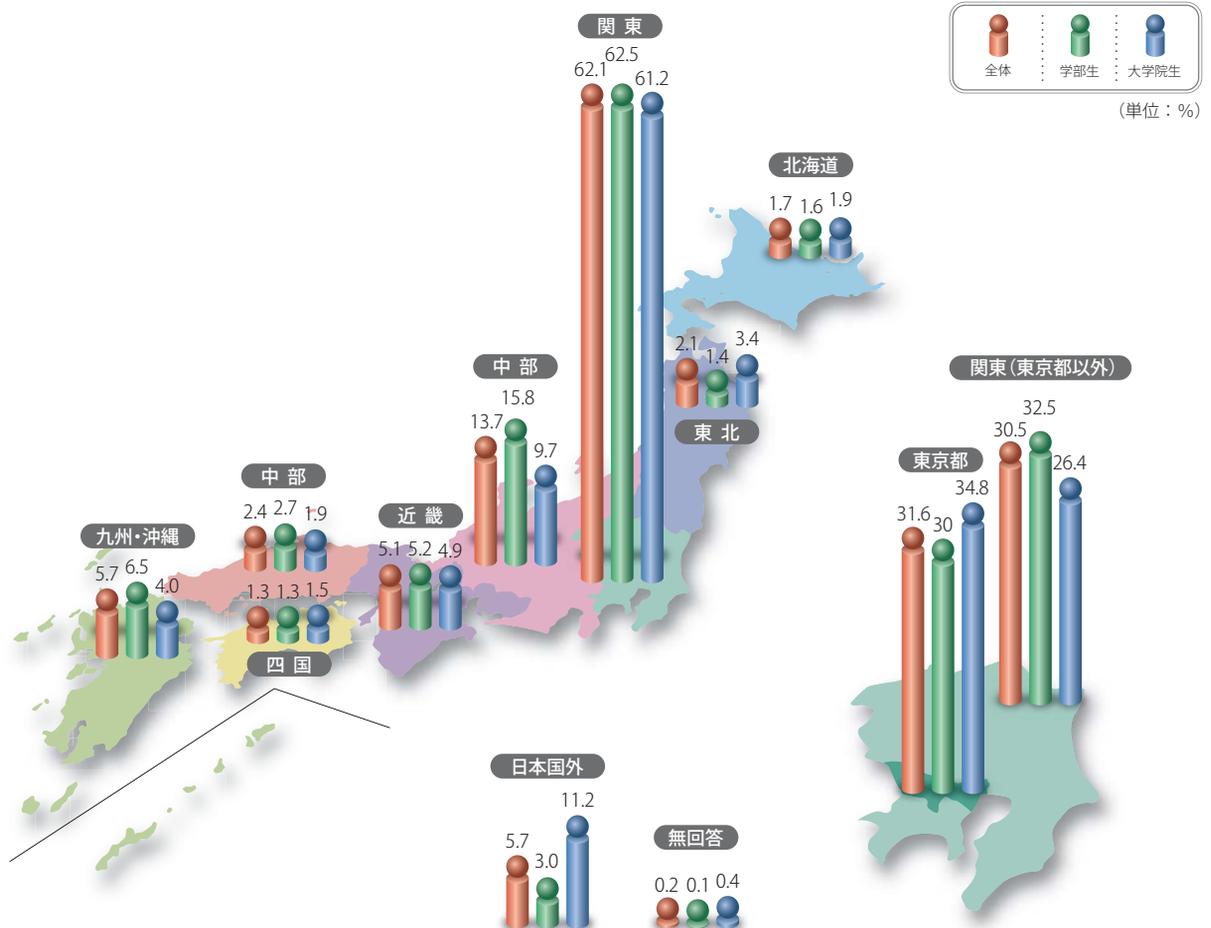
一橋大学生の家庭・家族の所在地は、東京都が全体の31.6%、東京都を含む関東地方が62.1%となっています。中部地方の13.7%がこれに次ぎます。日本国内では、さらに、九州・沖縄地方5.7%、近畿地方5.1%、中国地方2.4%と続きます。注目されるのは、日本国外が5.7%あることです。

学部生と大学院生とでは、日本国内での内訳は近畿地方までは同じ順ですが、近畿地方に次ぐのは学部生の場合は中国地方であるのに対し、大学院生の場合は東北地方です。また、両者の違いで顕著なのは、日本国外の出身者の比重であり、学部生の場合3.0%(対全学部生比)であるのに対し、大学院生の場合は11.2%(対全大学院生比)であって中部地方の9.7%を上回っています。

(注意) 前頁では、大学院生のうち外国人留学生の比率が15%となっており、ここでの数字(11.2%)と異なっています。ここでは「家庭の所在地」を尋ねていますので、配偶者や子供を持つ留学生の多くが「関東出身」に分類されている可能性が高いことを指摘しておきます。

直近の国勢調査(平成17年度)の結果によれば、関東地方および東京都の人口構成比率(対全国比)は、それぞれ32.5%および9.8%です。このことから、一橋生の出身地は関東地方に集中しているといえます(図表II-1参照)。

図表 II-1 一橋大学生の出身地構成(家族・家庭の所在地)





また、家庭・家族の所在地を都市規模別に見ると、人口100万人以上の大都市が35.6%、人口10万人以上の中都市が32.9%です。平成17年度の国勢調査の結果では、大都市人口比が21.8%、中都市人口比が44.0%となっていることを考え合わせれば、一橋大生の出身地は大都市に傾斜しているといえます。この傾向は、学部生と大学院生とで共通しています(図表II-2参照)。

図表II-2 一橋大学生の出身都市



I 回答学生について

II 家庭の状況について

III 生活費の状況について

IV 通学・住居について

V 経済支援について

VI アルバイトについて

VII 進路・就職について

VIII 生活支援について

IX 入学について

X 学生生活について

XI 大入の要諦について

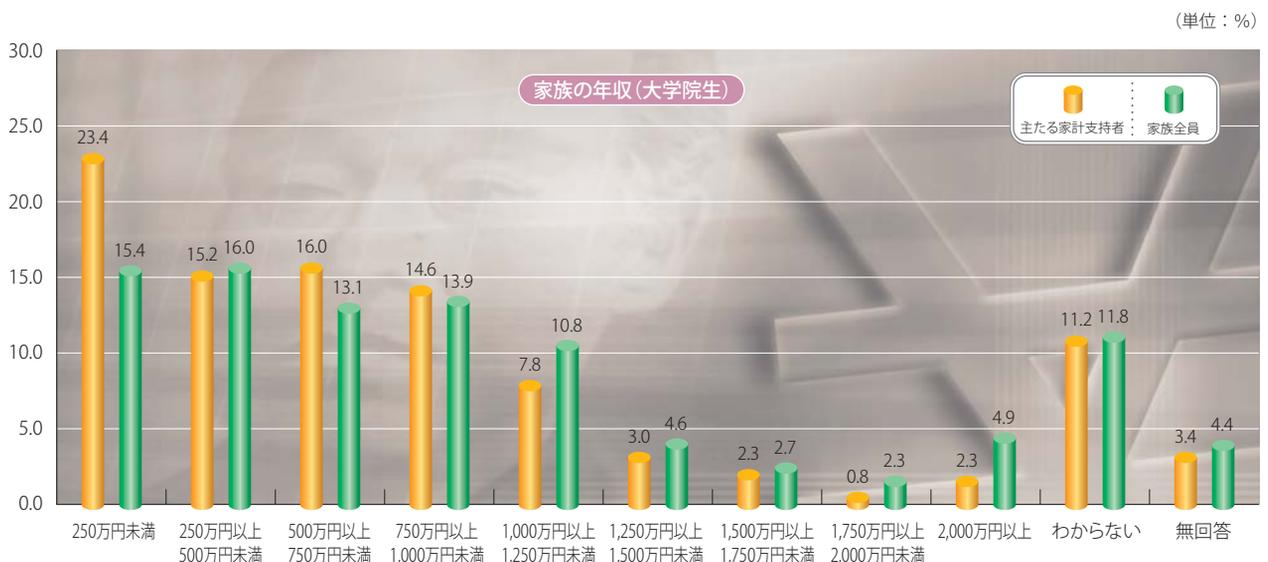
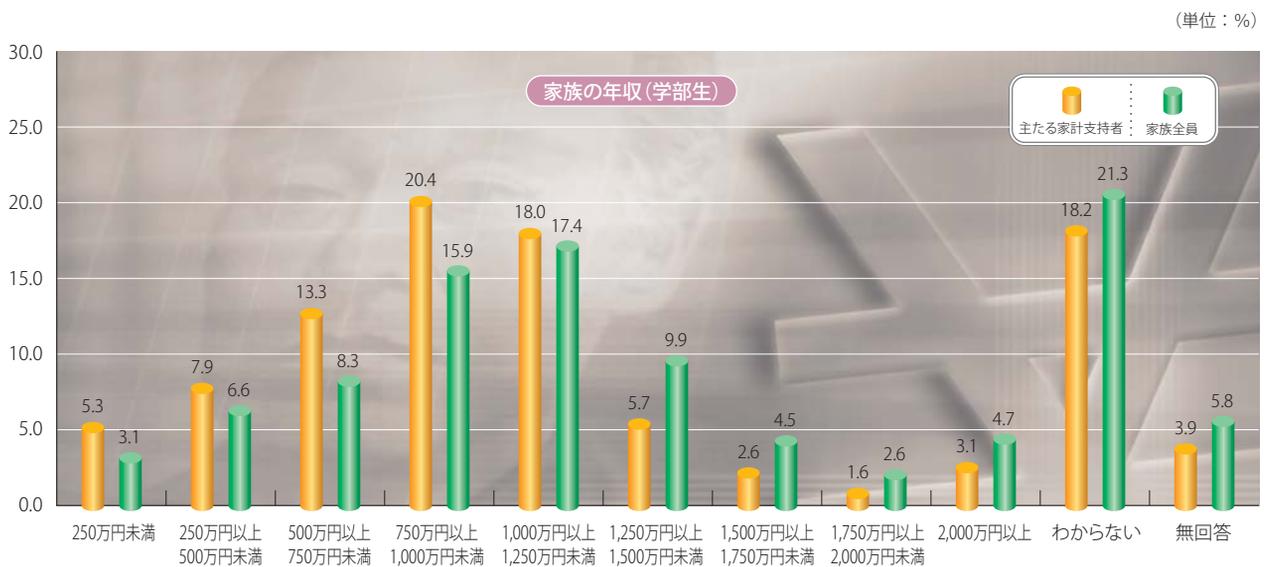
家庭の状況について

家計の状況について

《主たる家計支持者》は、学部生の場合、全体の90.0%が〈父〉、6.9%が〈母〉です。これに対し、大学院生の場合、全体の55.9%が〈父〉、次いで〈本人〉が17.9%、〈配偶者〉が10.3%、〈母〉が7.0%です。

《主たる家計支持者》の年収では、学部生の場合、〈750万円以上1,000万円未満〉が20.4%で最多、これに〈1,000万円以上1,250万円未満〉が18.0%、〈500万円以上750万円未満〉が13.3%と続きます(ただし、〈わからない〉が18.2%、〈無回答〉が3.9%あります)。これに対し、大学院生の場合、最多は〈250万円未満〉で23.4%、これに続き、〈500万円以上750万円未満〉が16.0%、〈250万円以上500万円未満〉が15.2%、〈750万円以上1,000万円未満〉が14.6%です(ただし、〈わからない〉が11.2%、〈無回答〉が3.4%あります)(図表II-3参照)。ちなみに、国税庁『民間給与実態統計調査』によれば、平成18年度分平均給与は435万円です。

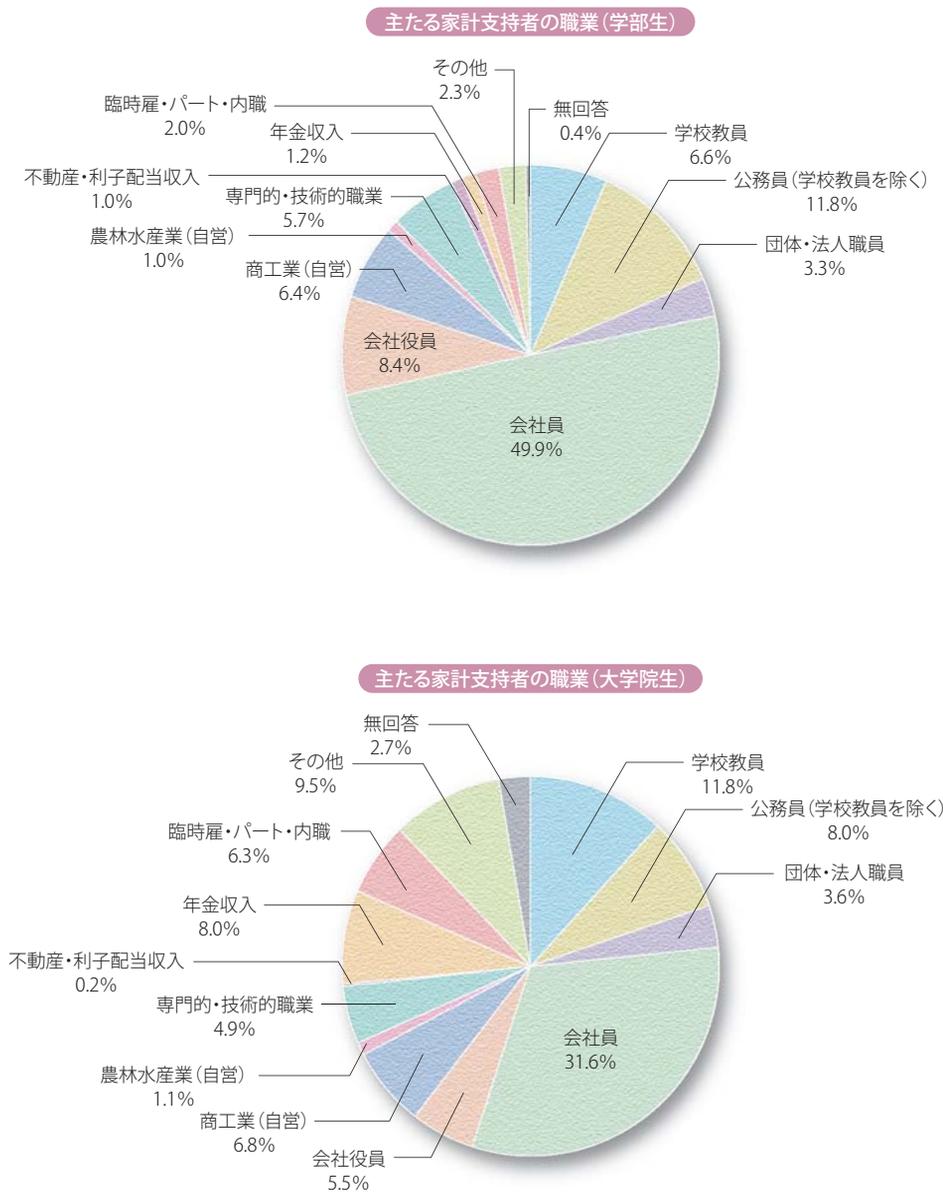
図表 II-3 家族の年収





《主たる家計支持者》の職業は、学部生の場合、〈会社員〉が全体の49.9%で最多です。次いで、〈公務員（学校教員を除く）〉が11.8%、〈会社役員〉が8.4%、さらに、6%前後で〈学校教員〉〈商工業（自営）〉〈専門的・技術的職業（医師・薬剤師・弁護士・芸術家など）〉が続きます。一方、大学院生の場合、〈会社員〉が最多ですが、その割合は31.6%です。これに続くのは〈学校教員〉で11.8%、〈その他〉が9.5%、〈公務員（学校教員を除く）〉と〈年金収入〉とがともに8.0%です（図表II-4参照）。

図表II-4 主たる家計支持者の職業



I 回答学生について

II 家庭の状況について

III 生活費の状況について

IV 通学・住居について

V 経済支援について

VI アルバイトについて

VII 進路・就職について

VIII 生活支援について

IX 入学について

X 学生生活について

XI 大学の選考について

生活費の状況について

生活費の状況は、学部生と大学院生では様相が異なります。

学部生の状況

学部生の場合、1か月平均の収支額には、相当にばらつきがあります。8万円～10万円未満と14万円～16万円未満の2つが最も多い層ですが、その間や前後も相当数あります。平均値は131.5千円（標準偏差は87.9千円）です。自宅生と自宅外生では6万7千円程度の差があり、自宅外生の方が高くなっています。これは主として住居費・食費の大きさによるものと考えられます（図表Ⅲ-1 参照）。

収入の構成としては、〈家族からの仕送り・小遣い〉が占める割合が一番高く、収入の44.4%を占めています。次いで、〈アルバイト・給与〉が28.8%、〈奨学金〉が17.4%となっています。貯蓄の取り崩しやその他の収入はあまり多くはないようです。自宅生と自宅外生とでは〈家族からの仕送り・小遣い〉と〈アルバイト・給与〉の比率に大きな差が出ていますが、これは両者の収入・支出総額の相違に起因するものであり、アルバイト収入金額という点ではさほどの差はないものと考えられます（図表Ⅲ-2 参照）。

支出の構成では、生活基礎支出費（食費・住居費）が4割強を占めています。自宅生の生活基礎支出費の割合は、住居費がほとんどかからないため、自宅外生のその半分以下、3分の1近くですが、収入・支出総額の大きさを考慮すると、実際の支出額には大きな開きがあることとなります。さらに、通学費は自宅生の方がかなり高くなっています。これは自宅外生の多くが大学近辺に住んでいる一方で、自宅生は必ずしもそうではないことに起因すると考えられます。また、教養・娯楽費が勉学費の2倍強となっていることは特徴的です（図表Ⅲ-3 参照）。

現在の暮らし向きを〈普通〉と考えているのが34.2%、〈やや楽な方〉が22.5%、〈かなり楽な方〉が21.0%あり、77.7%が普通ないし楽であると考えています。前回の調査時（平成17年度）より若干比重が増えています（図表Ⅲ-4 参照）。

大学院生の状況

大学院生の場合、1か月平均の収支額は、20万円以上が最多です。平均値は166.2千円（標準偏差は89.5千円）です（図表Ⅲ-1 参照）。

収入の構成は、〈奨学金〉が32.3%と最も多く、次いで、〈アルバイト・給与〉28.5%、〈家族からの仕送り・小遣い〉が18.8%となっています。自宅生と自宅外生で〈家族からの仕送り・小遣い〉〈アルバイト・給与〉の比率に差があるのは学部生と同様ですが、その差は相対的に小さくなっています。〈奨学金〉の比率の差も特徴的です（図表Ⅲ-2 参照）。

支出の構成の方は、生活基礎支出費（食費・住居費）が4割強を占めています。自宅生の生活基礎支出費の割合と自宅外生のそれは、学部生と比べてかなり接近しています（自宅生35.4%、自宅外生45.7%）。これは、大学院生の場合、自宅生も住居費を一定程度支出しているためです。さらに、通学費は自宅生の方が自宅外生の2倍強となっており、自宅外生の多くが大学近辺に住んでいる一方で、自宅生は必ずしもそうではない事情がここでもあてはまります（図表Ⅲ-3 参照）。

現在の暮らし向きを〈普通〉32.9%と考えているのが最多である点は学部生と同じですが、〈やや苦しい方〉29.3%、〈たいへん苦しい方〉13.1%とを合わせて42.4%であるのに対し、〈やや楽な方〉11.8%と〈かなり楽な方〉6.5%とを合わせた割合は18.3%であり、暮らし向きが苦しいと考えている人の割合は大学院生の方が高くなっています（図表Ⅲ-4 参照）。

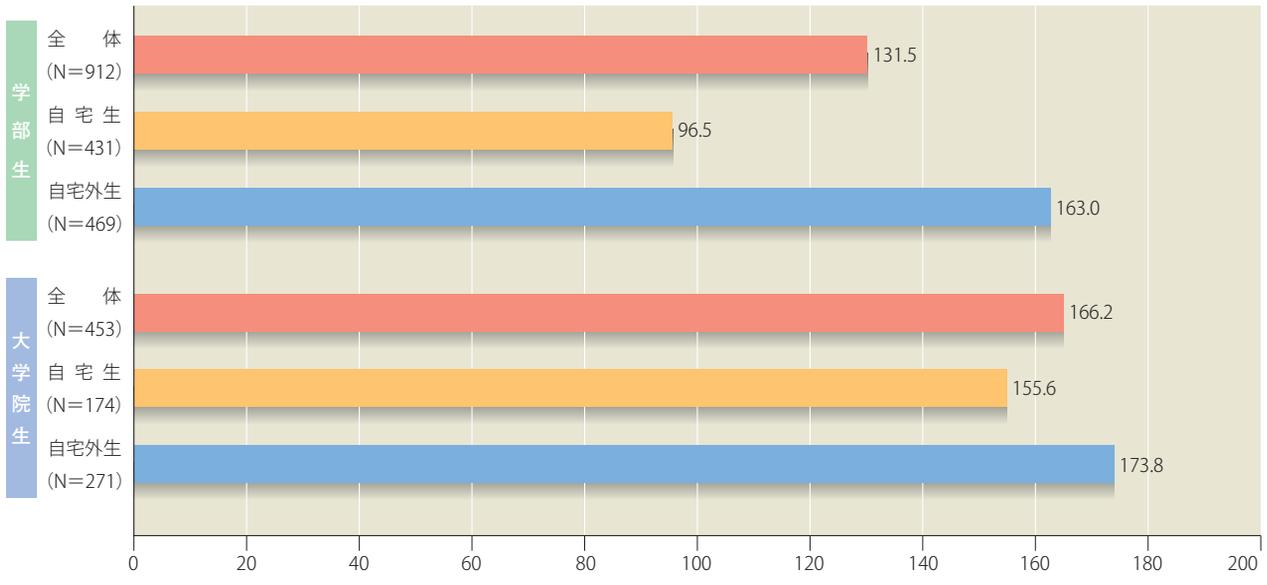


収入・支出について

(注意) 今回のアンケート回答においては、収入額合計と支出額合計とが一致していない回答が少なからずあったため、(1) 収入か支出がすべての項目で無回答の場合 (=合計が空欄) は、記入がある方の合計を収入・支出額合計とし、(2) 収入額合計と支出額合計が一致していないものについては、両者のうち多い方を収入・支出額合計としました。そのため、以下に述べる分析結果は、学生生活の実態を必ずしも反映していない可能性があることをあらかじめ指摘しておきます。N=平均値算出に使用した回答数です。

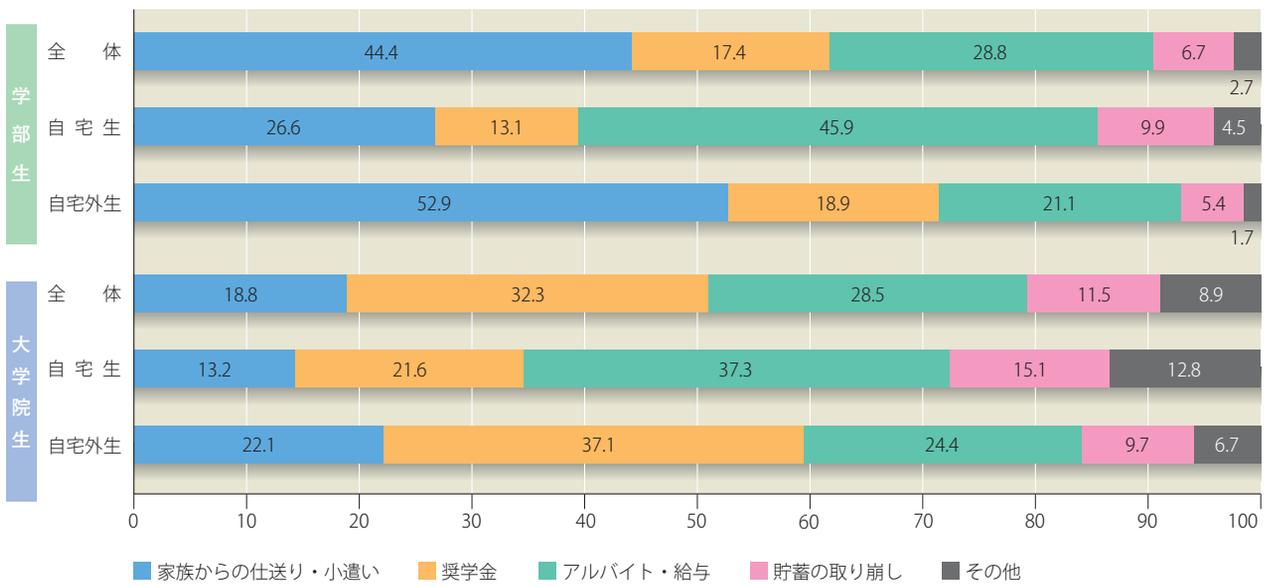
図表 III-1 収入・支出額合計 (平均値)

(単位: 千円)



図表 III-2 収入の構成 (平均値)

(単位: %)

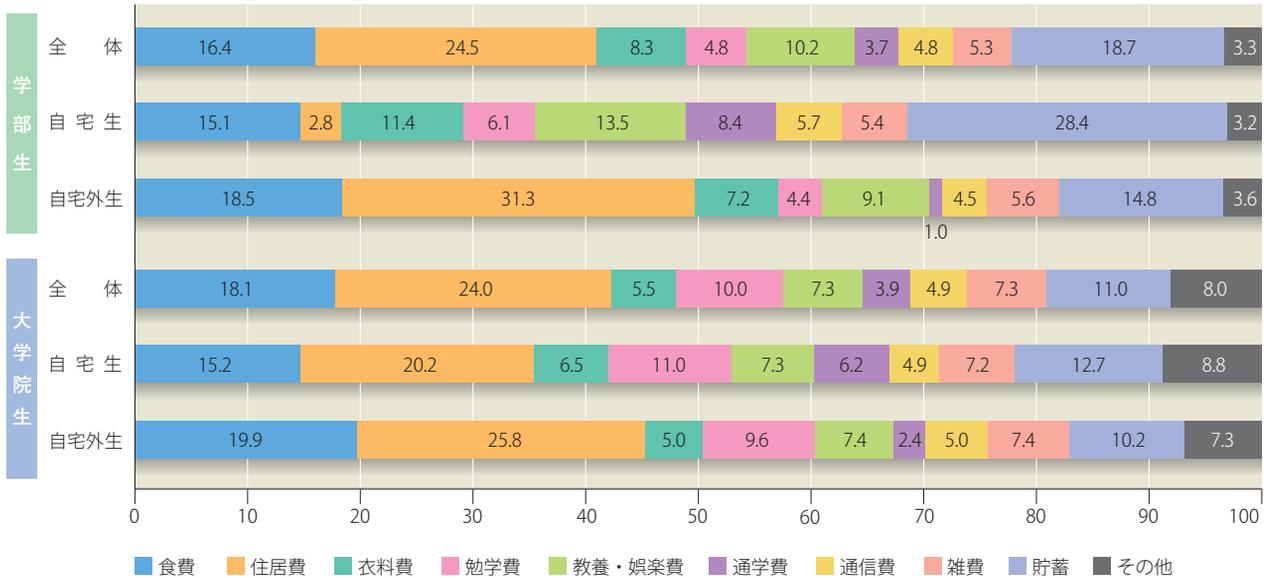


(注意) 図表 III-2 の平均値算出にあたっては、各収入・支出額に 0 円と記入されていた項目については分析対象とし、空欄のものについては、対象外としました。

生活費の状況について

図表Ⅲ-3 支出の構成(平均値)

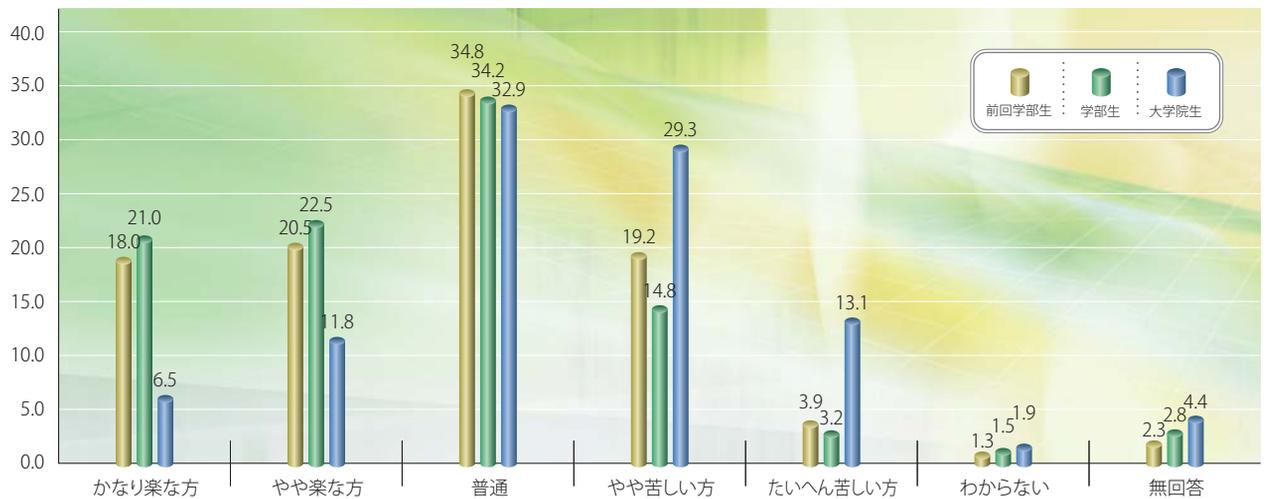
(単位：%)



(注意) 図表Ⅲ-3の平均値算出にあたっては、各収入・支出額に0円と記入されていた項目については分析対象とし、空欄のものについては、対象外としました。

図表Ⅲ-4 現在の暮らし向きについて

(単位：%)



IV

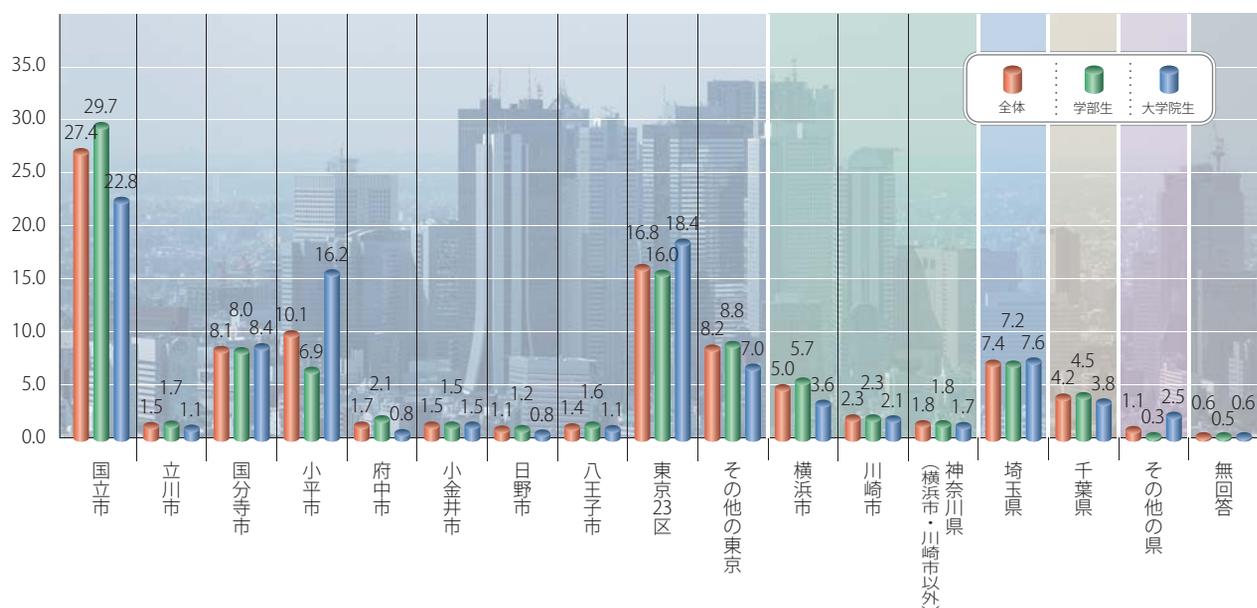
通学・住居について

住居は、自宅外が53.8%、自宅が44.6%です。学部生の場合は、両者はより拮抗していますが(自宅外が51.2%、自宅が47.4%)、大学院生の場合は、自宅生は少なくなります(自宅外が59.1%、自宅が39.0%)。居住地は、国立市が最も多く27.4%です(学部生は29.7%、大学院生は22.8%)。次に多いのは東京23区で16.8%です(学部生は16.0%、大学院生は18.4%)。これに小平市10.1%、その他の東京8.2%、国分寺市8.1%、埼玉県7.4%と続きます(学部生単体では、その他の東京、国分寺市、埼玉県、小平市の順、大学院生は、小平市、国分寺市、埼玉県、その他の東京の順です)。大学近隣地域(国立市、小平市、国分寺市、立川市)の総計が47.1%(学部生は46.3%、大学院生は48.5%)ですので、半数近くがこれらの近隣地域に居住していることがわかります(図表IV-1参照)。

通学時間は、片道30分未満が最も多く42.2%、30分以上1時間未満をあわせると62.0%、さらに1時間以上1時間30分未満を加えると81.8%となります。通学には電車の利用が最も多く54.8%ですが、自転車が37.8%、徒歩のみも4.6%にのびります。これらも大学近隣地域に居住する学生が多いことの表れといえます(図表IV-2参照)。

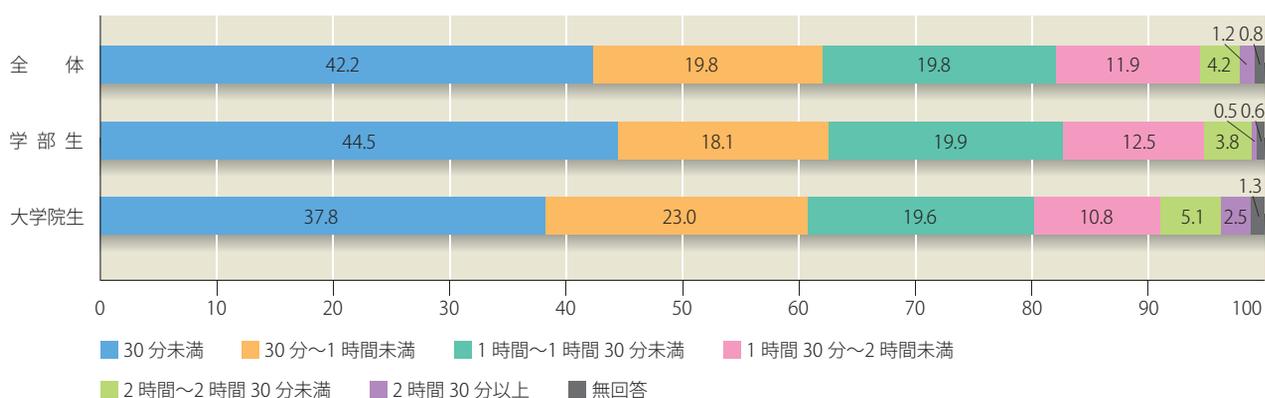
図表IV-1 学生の居住地

(単位：%)



図表IV-2 通学所要時間

(単位：%)

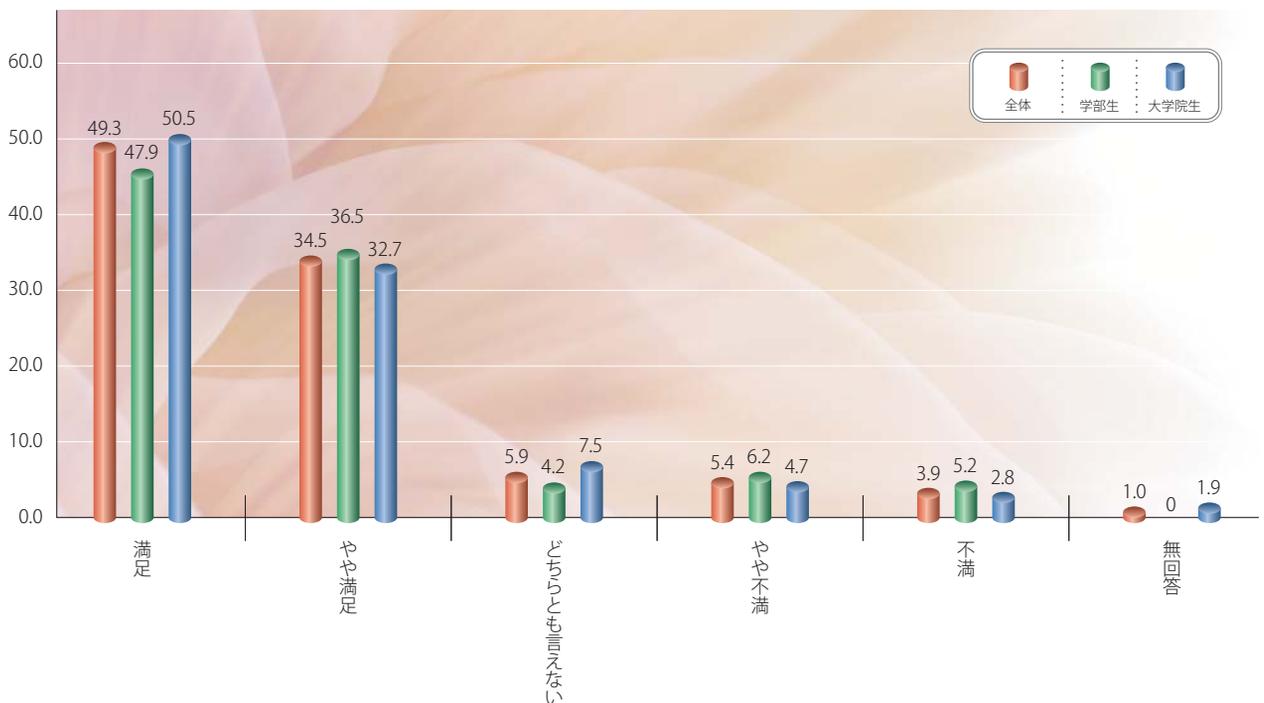


通学・住居について

学生寮の入居者(入居済み・入居経験者)は14.4%ですが、学部生の場合は10.2%であるのに対し、大学院生の場合は22.6%にのぼります。学生寮については、入居経験はないが知っている人が76.3%です(学部生の場合は80.1%、大学院生の場合は69.0%)。学生寮の満足度については、学生寮入居者のうち、49.3%が「満足」、34.5%が「やや満足」と回答しており、両者をあわせると8割を超えています(学部生の場合84.4%、大学院生の場合83.2%)(図表IV-3参照)。

図表IV-3 学生寮の満足度

(単位：%)





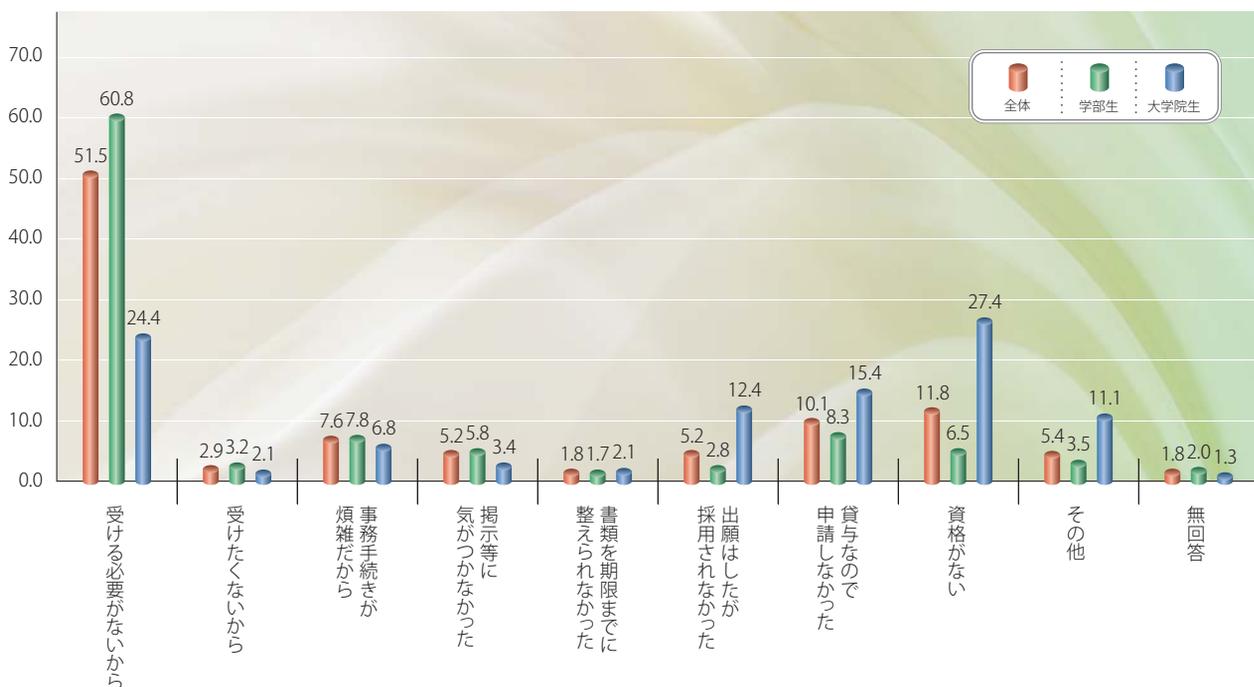
経済支援について

本学が実施している経済支援(授業料免除、アルバイト斡旋、学生金庫による短期融資)を利用する学生は、特に学部生の間ではそれほど多くはありません。授業料免除を利用したことのない学生は、存在を知らなかった学生を合わせると80.5%となります(学部生90.2%、大学院生61.4%)。大学が実施しているアルバイト斡旋についても利用経験者は1割程度で、〈利用しない〉と〈知らない〉をあわせると76.8%にのぼり、学外のネットワークによってアルバイト探しをしている実態が浮かび上がります。また、学生金庫による短期融資制度については、回答者1,412名中、〈よく利用する〉と〈時々利用する〉があわせてわずか3名しかおらず、ほとんどの学生がこの制度の存在すら知らない状況であることがわかります。制度そのものの見直しが必要なのかもしれません。

次に奨学金制度については、応募経験のある学生は28.7%にとどまり(学部生18.9%、大学院生48.1%)、〈応募したことがない〉が56.6%、〈知らない〉が13.5%いました。現実に奨学金を受けている学生は、全体の33.4%となっています(学部生25.8%、大学院生48.5%)。このように、奨学金の応募・受給については、学部生と大学院生の間には大きな違いがあります。日本学生支援機構『平成18年度学生生活調査結果』によれば、アンケートに回答した大学学部(昼間部)の学生のうち奨学金を受給している者の割合は40.9%であり、この値と比較すると、本学の学部生の奨学金受給率は相対的に低いといえます。奨学金を受けていない学生に、奨学金を受けていない理由を聞いたところ、51.5%の学生(学部生60.8%、大学院生24.4%)が〈受ける必要がない〉ことを理由にあげています。これは、Ⅱ家庭の状況(P.6 図表Ⅱ-3 参照)、Ⅲ生活費の状況(P.8~P.10 図表Ⅲ-1~4 参照)の分布と無関係ではないと考えられます(図表V-1 参照)。

図表V-1 奨学金を受けない理由

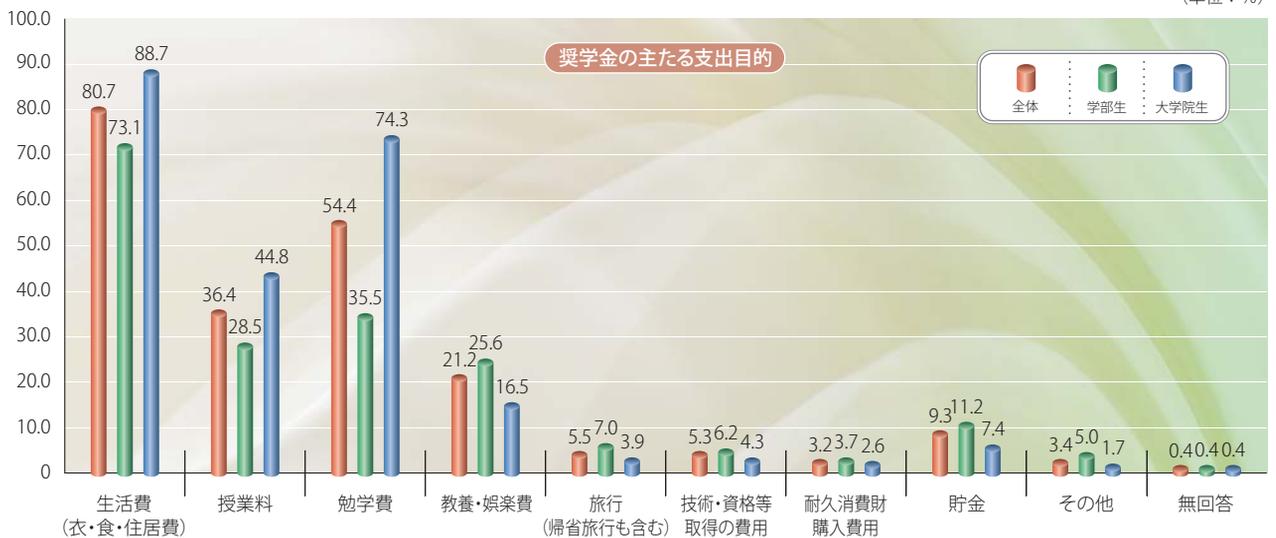
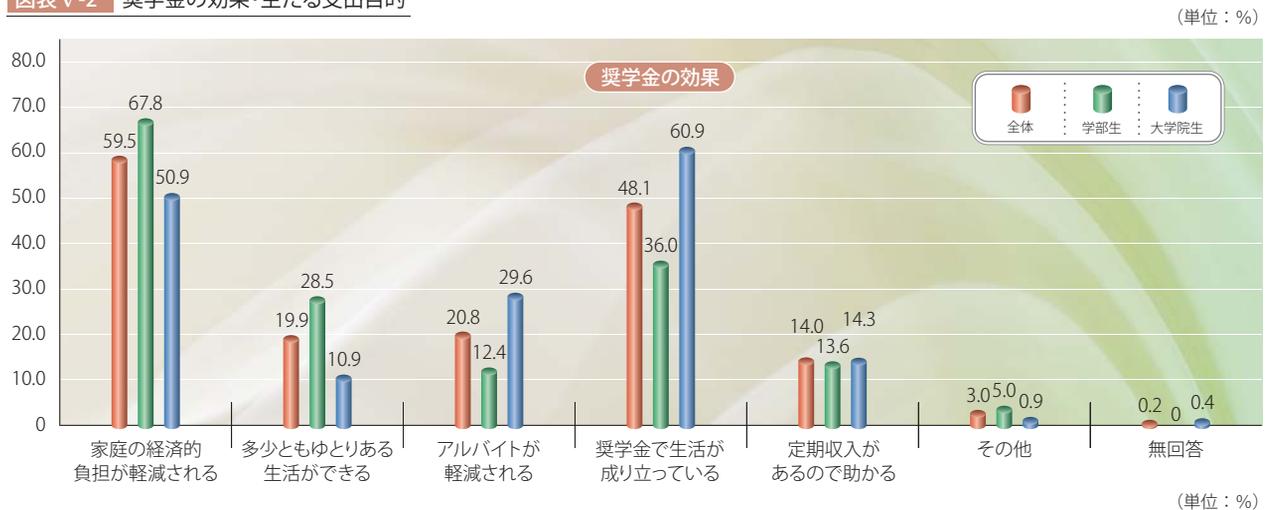
(単位：%)



経済支援について

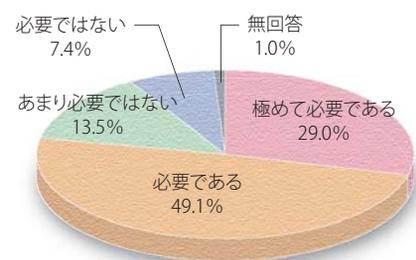
なお、奨学金を受けている学生のうち、種別割合は〈日本学生支援機構第一種奨学金〉が61.2%、〈日本学生支援機構第二種奨学金〉が30.5%、〈民間奨学団体・地方公共団体等の奨学金〉が15.5%となっています。奨学金の受給者数には限りがあるのは仕方のないことですが、学部生・大学院生・留学生含めて総じて、その経済的効果の大きいことは、〈家庭の経済的負担が軽減される〉が59.5%、〈奨学金で生活が成り立っている〉が48.1%との回答から窺われます。奨学金の主たる支出目的も、〈生活費(衣・食・住居費)〉が80.7%に上っています(図表V-2 参照)。

図表V-2 奨学金の効果・主たる支出目的



また、平成19年度に導入された学業優秀学生奨学金制度の必要性についての設問については、〈極めて必要である〉と〈必要である〉と考える学生があわせて78.1%おり、関心の高さが窺えます。如水会による海外留学奨学金の制度を含め、学業優秀学生奨学金制度については、学生への広報につとめ浸透していけば、学生の学習意欲を高めインセンティブを与えられるものとなることが期待されます(図表V-3 参照)。

図表V-3 学業優秀学生奨学金制度の必要性(学部生+大学院生)



VI

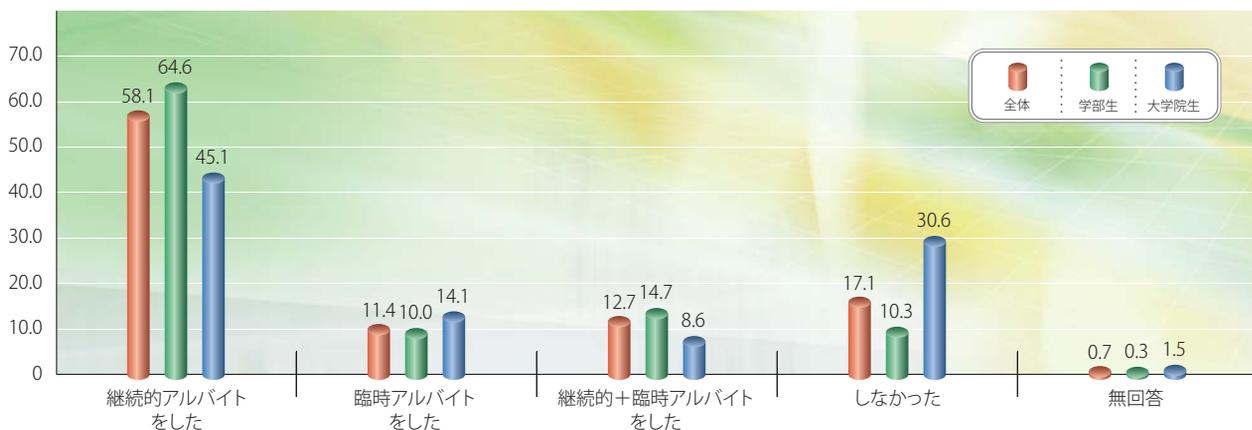
アルバイトについて



過去一年間で〈継続的なアルバイト経験〉の割合は58.1%であり、〈臨時的なアルバイト経験〉11.4%や〈継続と臨時を合わせたアルバイト経験〉12.7%を合わせると、82.2%となりほとんどの学生がアルバイトを経験していることがわかります。アルバイトを〈しなかった〉学生は、17.1%にすぎません(図表VI-1 参照)。

図表VI-1 過去1年間のアルバイト経験

(単位：%)



経験したアルバイトの種類をみると、〈家庭教師〉が23.9%、〈塾講師〉が23.4%であり(複数回答可)、〈試験監督・採点〉の11.8%もあわせれば、非常に多くの学生が教育関係のアルバイトを経験していることがわかります。また、〈販売・セールス・サービス業〉の経験者が34.2%おり、教育関係のアルバイトに次ぐ高いパーセンテージとなっています。学部生と大学院生で比較してみると、学部生にはない特徴として、大学院生の場合には、アルバイトの種類として、〈TA・RA〉が23.9%、〈大学での非常勤講師〉が5.6%あり、大学での教歴を経験するものが多いことがわかります(図表VI-2 参照)。

図表VI-2 アルバイトの種類

(単位：%)



I 回生学生について

II 家庭の状況について

III 生活費の状況について

IV 通学・住居について

V 経済支援について

VI アルバイトについて

VII 進路・就職について

VIII 生活支援について

IX 入学について

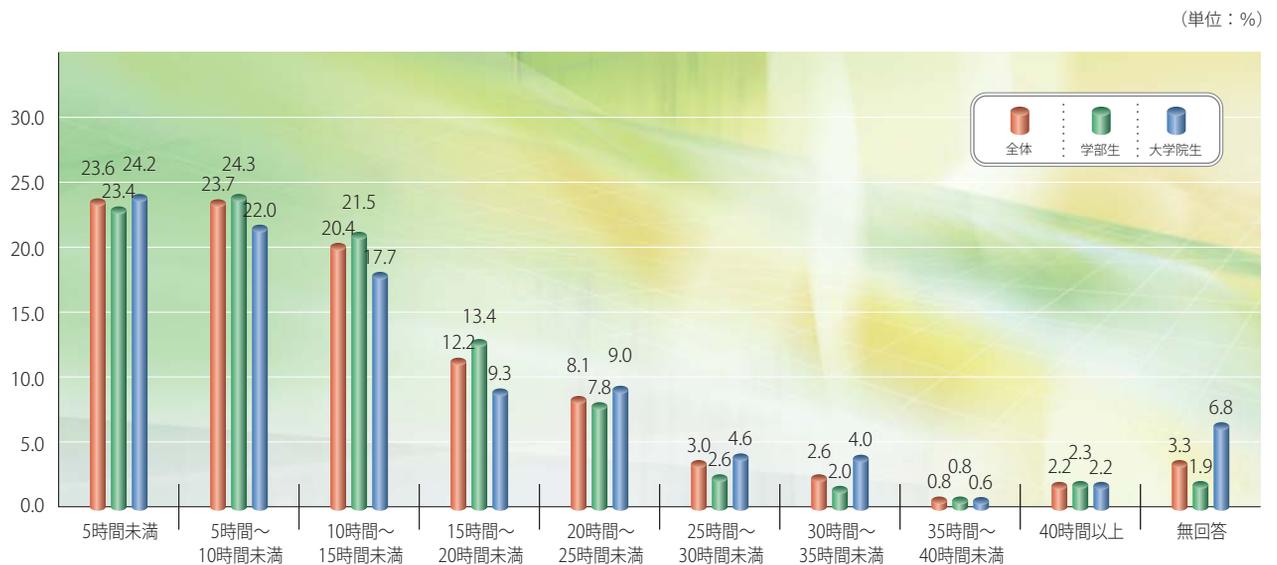
X 学生生活について

XI 大入の要請について

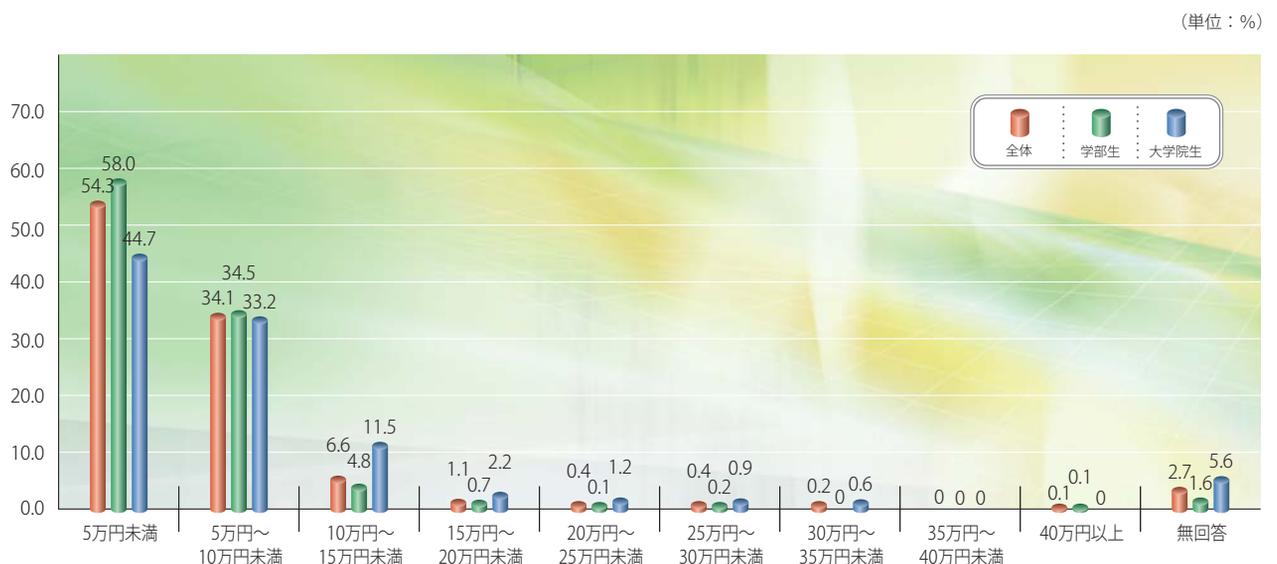
アルバイトについて

アルバイトに費やす時間は、1週間に5時間未満の学生が回答者(1,160名)の23.6%、5時間～10時間未満の学生が23.7%、10時間～15時間未満の学生が20.4%で、最も多く、ただし、1週間に〈30時間以上〉アルバイトを行っている者も5.6%(65名)いることも明らかになりました(図表VI-3参照)。アルバイトによる1ヶ月の収入については、5万円未満の学生が54.3%、5万円～10万円未満の学生が34.1%となっており、収入が10万円を超える学生も回答者の8.8%(103名)いました(図表VI-4参照)。

図表VI-3 アルバイトの時間(週)



図表VI-4 アルバイトの平均月収



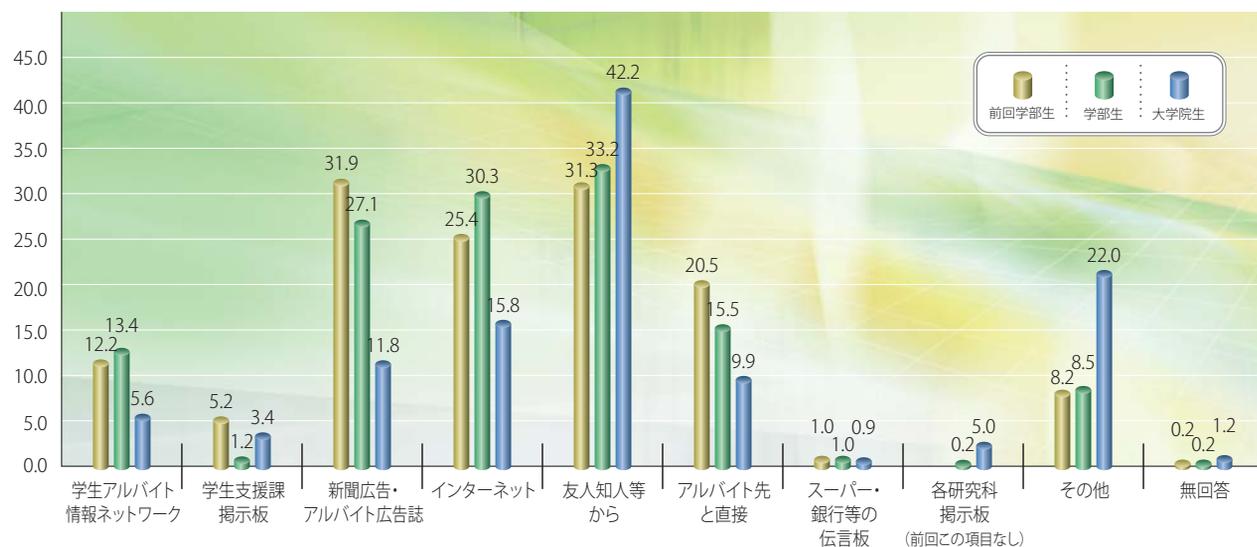


次にアルバイトの情報源についてみると、多いほうから順に〈友人知人等から〉が35.7%、〈インターネットから〉が26.3%、〈新聞広告・アルバイト広告誌〉が22.8%となっています(複数回答可)。ネット上での検索と従来の紙媒体での情報、口こみによる情報がともに利用されており、必ずしもネット情報のみに依存しているのではないことがわかります(図表VI-5 参照)。

また、〈学生支援課掲示板〉による情報収集は学部生ではわずか1.2%と低い数値となっており、前回の調査時の5.2%(平成17年度)をさらに下回っています。

図表VI-5 アルバイトの情報源

(単位：%)



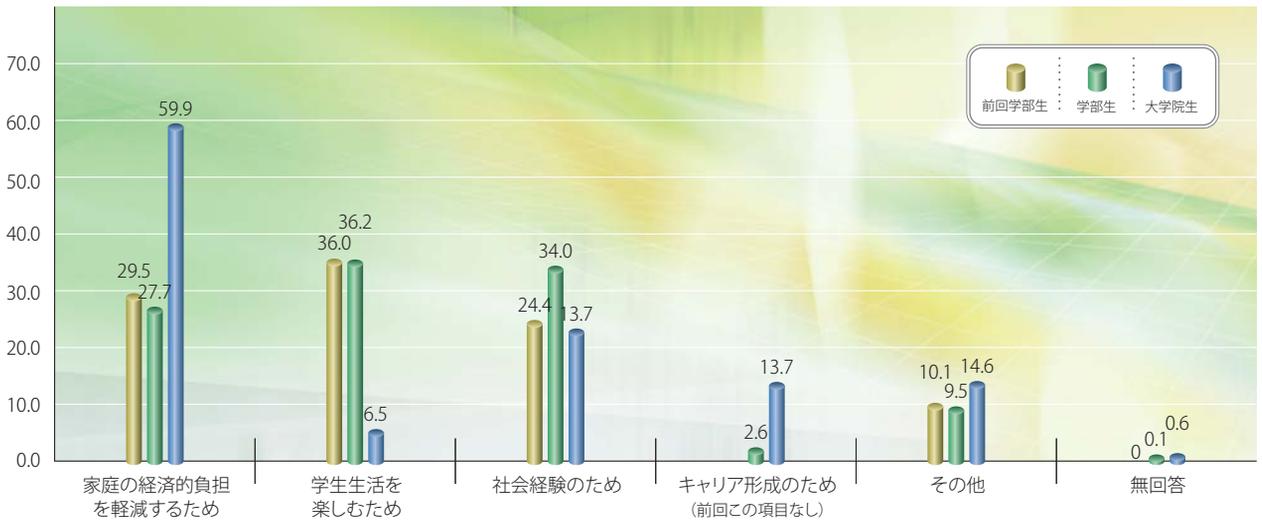
アルバイトをした理由については、学部生では〈学生生活を楽しむため〉の36.2%が一番多く、次に〈社会経験のため〉の34.0%、〈家庭の経済的負担を軽減するため〉の27.7%が続きます。これとは対照的に大学院生のアルバイトをした理由では、〈家庭の経済的負担を軽減するため〉が59.9%と圧倒的に多くなっており(図表VI-6 参照)、アルバイト収入の用途についても、〈生活費(衣・食・住居費)〉が主たるものとなっています。一方の学部生のほうは、〈生活費(衣・食・住居費)〉の55.6%以上に、〈教養・娯楽費〉が62.8%と多くなっており、大学院生とは異なる目的でアルバイトをしている実態が明らかになります。〈授業料〉0.1%や〈勉強費〉7.0%は低い数字となっていることから、授業料等の負担は基本的には保護者に任せ、学生生活をより円滑に、また充実したものとするためにアルバイトをしている実態が明らかになります(図表VI-7 参照)。



アルバイトについて

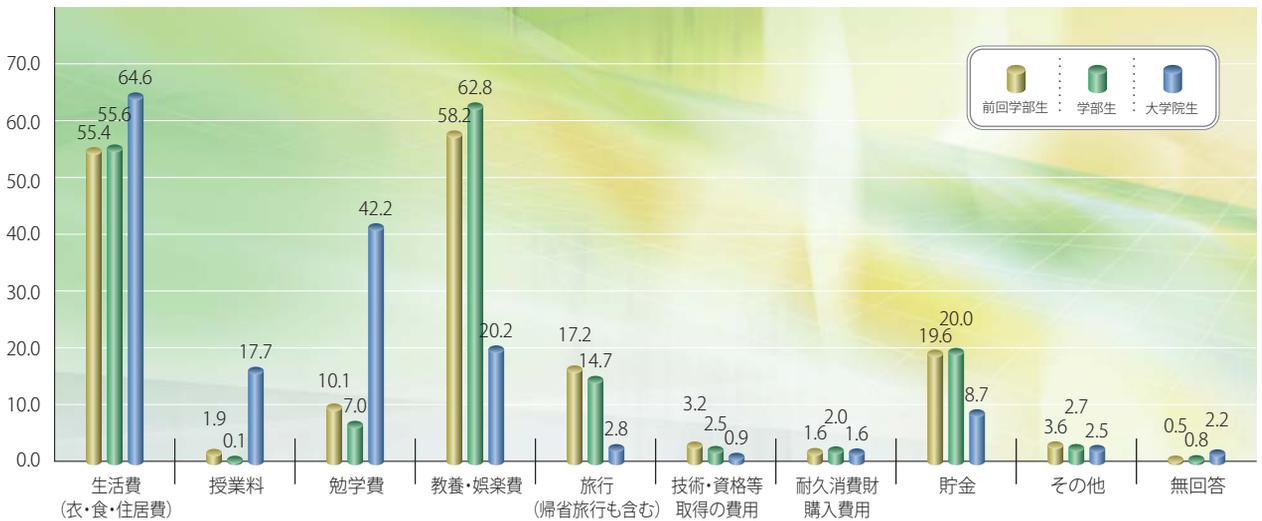
図表VI-6 アルバイトをした理由

(単位：%)



図表VI-7 アルバイト収入の用途

(単位：%)



- I 入学準備について
- II 家庭の状況について
- III 生活費の状況について
- IV 通学・住居について
- V 経済支援について
- VI アルバイトについて
- VII 進路・就職について
- VIII 生活支援について
- IX 入学について
- X 学生生活について
- XI 大卒の要諦について

VII

進路・就職について

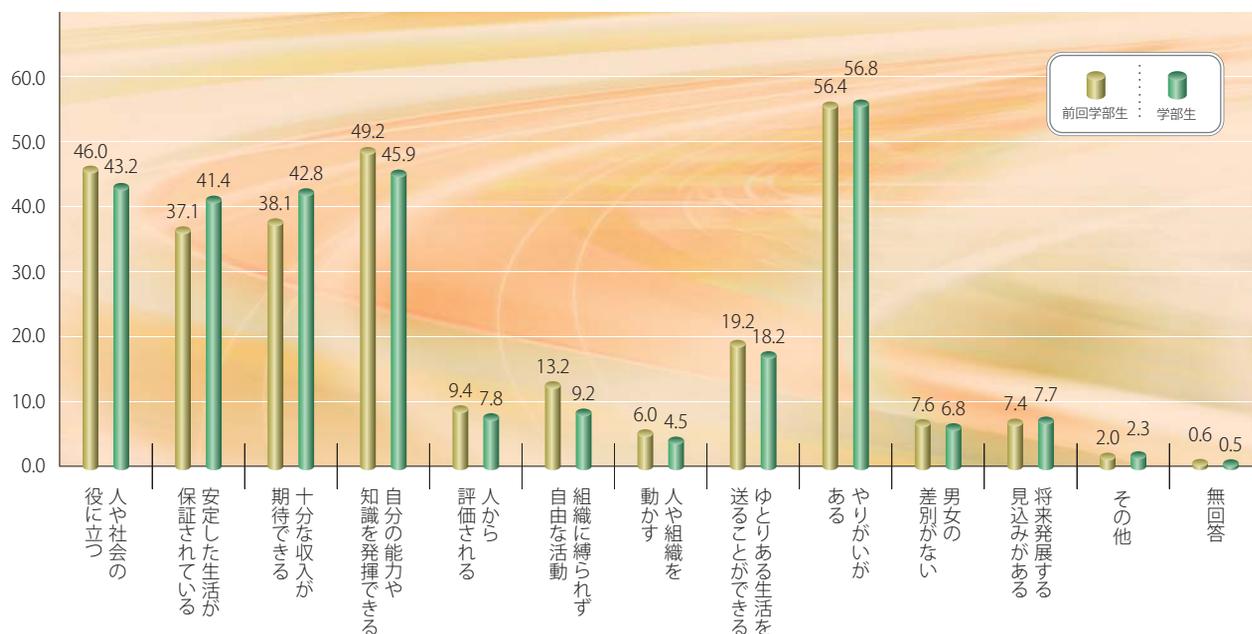
進路・就職については、学部生と大学院生では問題状況が全く異なるため、両者を合わせて分析することにより意味はなく、以下ではそれぞれについて検討してみます。

学部生

学部生の就職意識について、平成17年度の調査と比較してみますと、就きたい職業については、事務職が増加して(36.1%→43.1%)専門職が減少しています(36.7%→33.9%)が、大勢に変化はありません。また、仕事の選択基準もその順位に変化はありませんが(図表Ⅶ-1参照)、〈自分の能力や知識を発揮できる〉(専門性)や〈人や社会の役に立つ〉(公益性)が減少し、〈十分な収入が期待できる〉〈安定した生活が保証されている〉(経済性)が増加する傾向にあります。これは、社会全体の経済状況を反映したものではないかと思われます。

図表Ⅶ-1 仕事の選択基準

(単位：%)

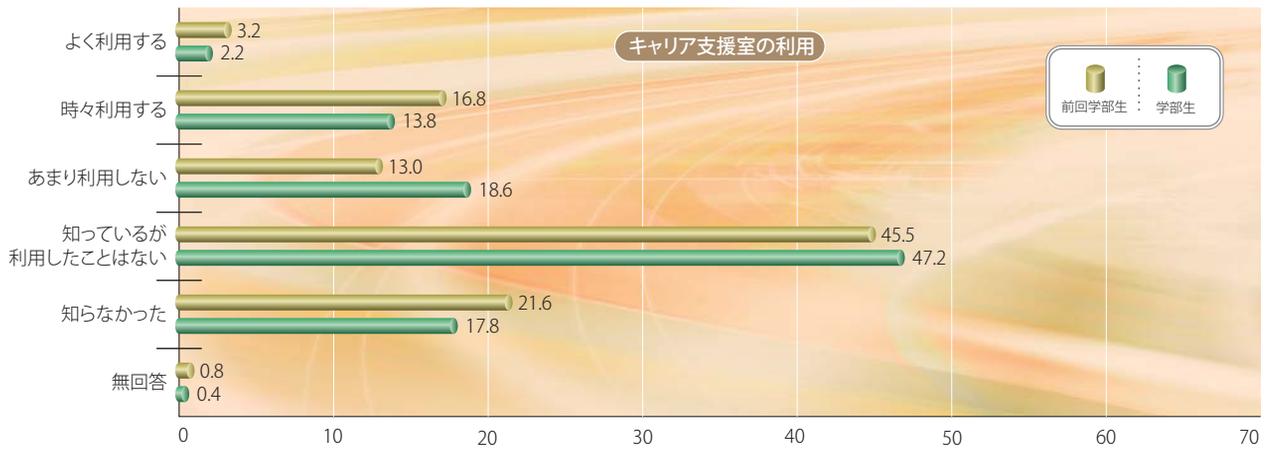


次に、進路支援策についてみてみますと(図表Ⅶ-2参照)、キャリア支援室は、知らない学生の割合は減少しているにもかかわらず、利用率は下がっているようです。他方、職業意識の形成を促すための科目(たとえば「社会人との対話による社会実践論」)の利用は増えています。入学時からのキャリア形成のためのプログラムについて約半数が必要としていることや大学に対する要望で〈就職対策の充実〉が23.7%と高いことなども考えますと(P.29図表Ⅺ-2参照)、就職状況の好調さを背景にして進路支援のニーズは余り顕在化していないものの、大学の体系的な取組に対する潜在的なニーズはかなりあるのではないかと考えられます。

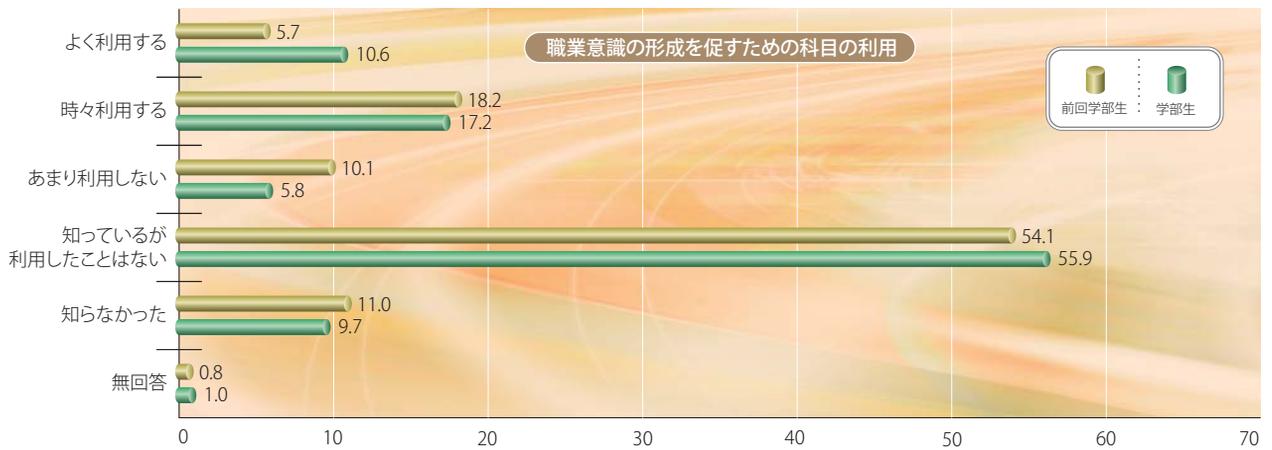
進路・就職について

図表VII-2 進路支援策

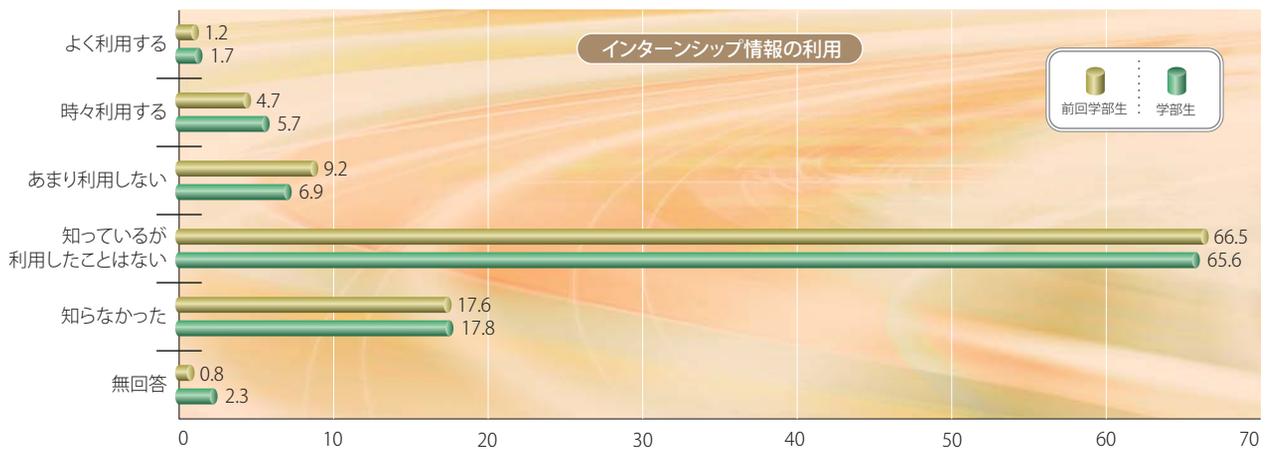
(単位：%)



(単位：%)



(単位：%)

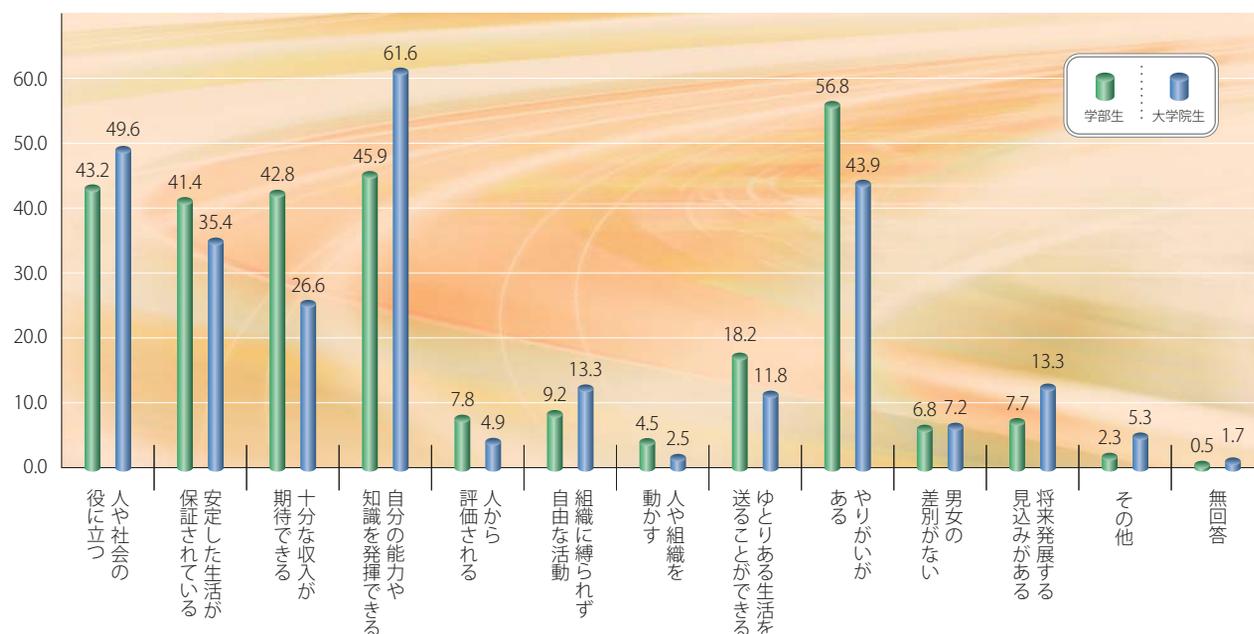


大学院生

大学院生は、学部生とは就職に対する認識が大きく異なっています。たとえば、仕事の選択基準(図表Ⅶ-3参照)も、学部生と比較すると、〈自分の能力や知識を発揮できる〉(専門性)や〈人や社会の役に立つ〉(公益性)が多く、〈十分な収入が期待できる〉〈安定した生活が保障されている〉(経済性)はかなり低いものになっています。経済的な希望は余り大きくなくても、専門性・公益性に関心を持つ傾向がみてとれます。

図表Ⅶ-3 仕事の選択基準

(単位：%)



大学院終了後の進路の予定としては、圧倒的に〈大学の研究職〉が多く(49.8%)、それに次ぐのが〈専門職〉(28.0%)、〈大学等の特別研究員〉(25.7%)ということになっています。その意味で、伝統的な進路が依然として前提とされています。しかし、そのような就職の現実の見通しは相当に厳しいようで、〈見通しが立たない〉と〈かなり厳しい〉を合計すると48.7%になっています。

ただ、そのような厳しい状況を前提にしても、大学に期待するところは余り大きくないようです。たとえば、学部生と比較すると、キャリア支援室の利用は少なく(学部生 16.0%、大学院生 9.2%)、〈就職対策の充実〉への期待も大きくありません(学部生 23.7%、大学院生 17.3%) (P.29 図表Ⅺ-2 参照)。これは、大学院生の多くが希望する研究職への就職について、大学が対策を講じることができる部分が小さいことを反映したものとも考えられます。ただ、今後は、特に専門職大学院の種類・定員の増加により、専門職への進路希望が中心になっていけば、大学院生の意識・要望が急激に変化する可能性も大きく、進路・就職についての大学の活動に期待が高まる可能性も否定できず、大学側の組織的な対応が必要になるようにも思われます。

VIII

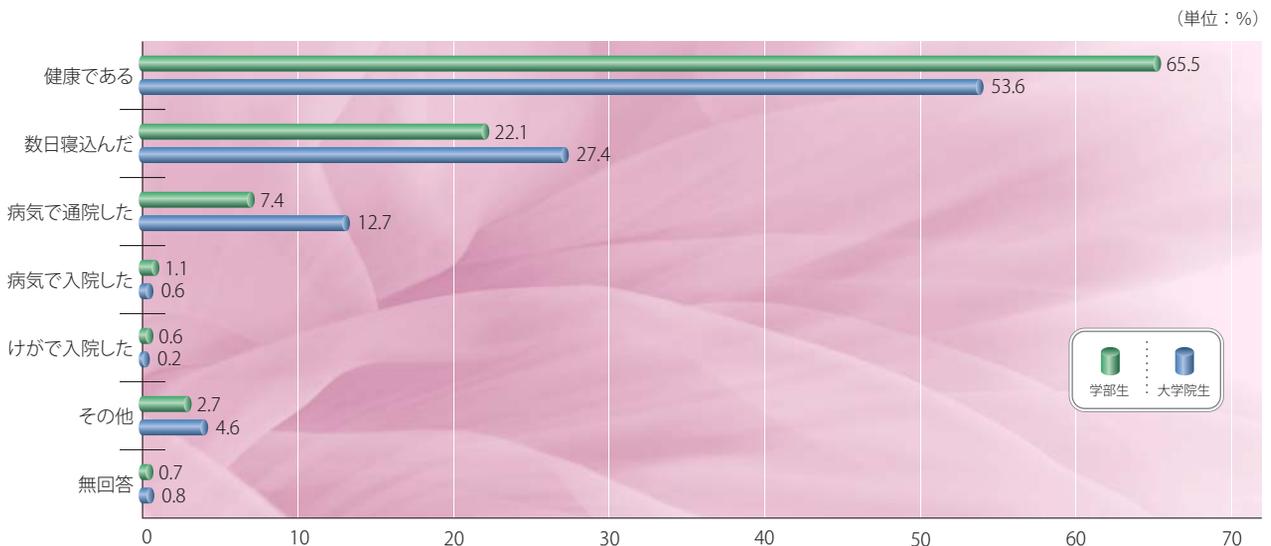
生活支援について

パソコンを所有している学生は学部生 90.2%、大学院生 97.5%と、ほとんどの学生が所有しています。メールアドレスについては、学部生においては、54.7%の学生が大学のものを、45.2%がプロバイダーのものを、62.6%の学生がフリーメールを使っています。

ハラスメントについて、セクシャルハラスメント(性的嫌がらせ)を感じた体験があると回答した学生が学部生で 2.5%、大学院生で 4.2%います。また、パワーハラスメント(部活等での立場の力関係を利用した嫌がらせ)は学部生 7.5%、大学院生 2.5%、アカデミックハラスメント(授業等における教員から学生への嫌がらせ)は学部生 3.3%、大学院生 11.2%となっています。アカデミックハラスメントを感じた経験のある院生の数は多いと言えます。

1年間の健康状態については、学部生の 65.5%、大学院生の 53.6%が健康だったと答えています。しかし数日寝込んだ学生が学部生 22.1%、大学院生 27.4%、病気で通院した学生が学部生 7.4%、大学院生 12.7%となっています。入院をした学生も学部生で 1.7%、大学院生で 0.8%います(図表Ⅷ-1 参照)。

図表Ⅷ-1 ここ1年間の健康状態



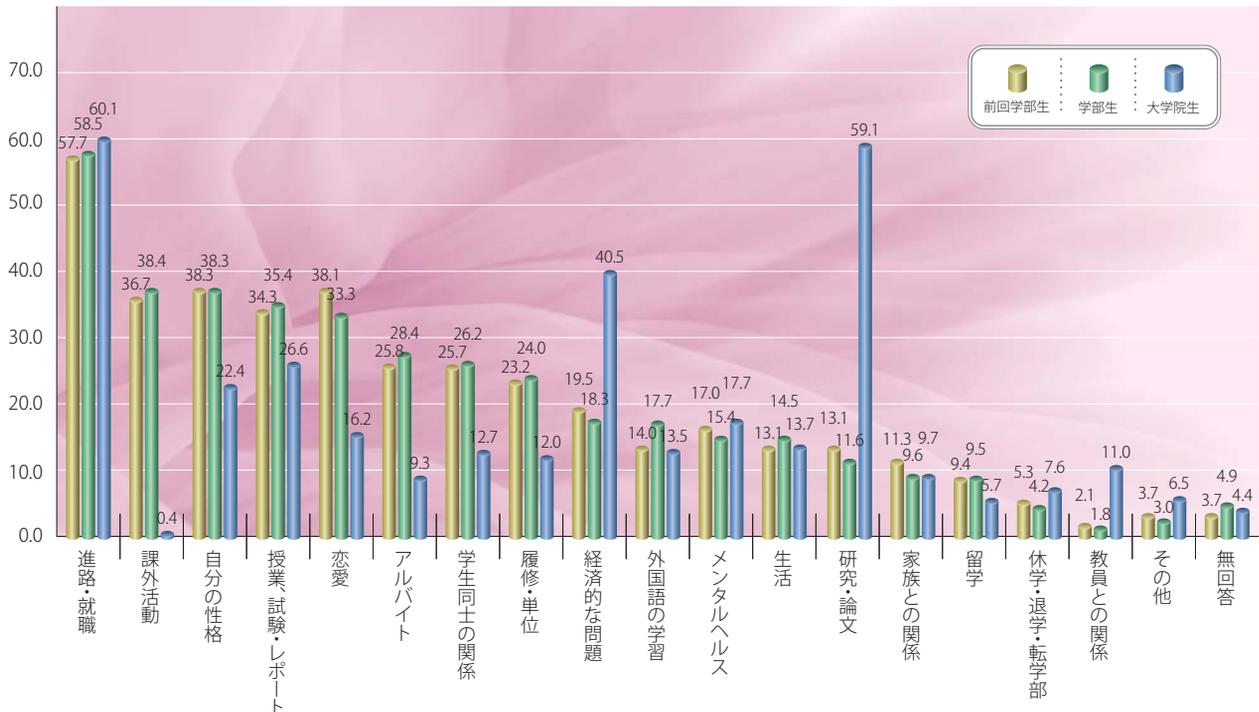
ここ一年間の悩みについて、学部生では、進路・就職(58.5%)、課外活動(38.4%)、自分の性格(38.3%)が多くなっています。前回調査と比べ、課外活動、授業・試験・レポート、アルバイト、外国語の学習、生活などが増加しています。本学における学習支援、生活支援のさらなる充実が必要に思われます。

大学院生については、進路・就職(60.1%)、研究・論文(59.1%)、経済的な問題(40.5%)の3つがたいへん多くなっています。大学院生にはこの3つに集中した支援が必要なようです(図表Ⅷ-2 参照)。



図表Ⅷ-2 ここ1年間の悩み

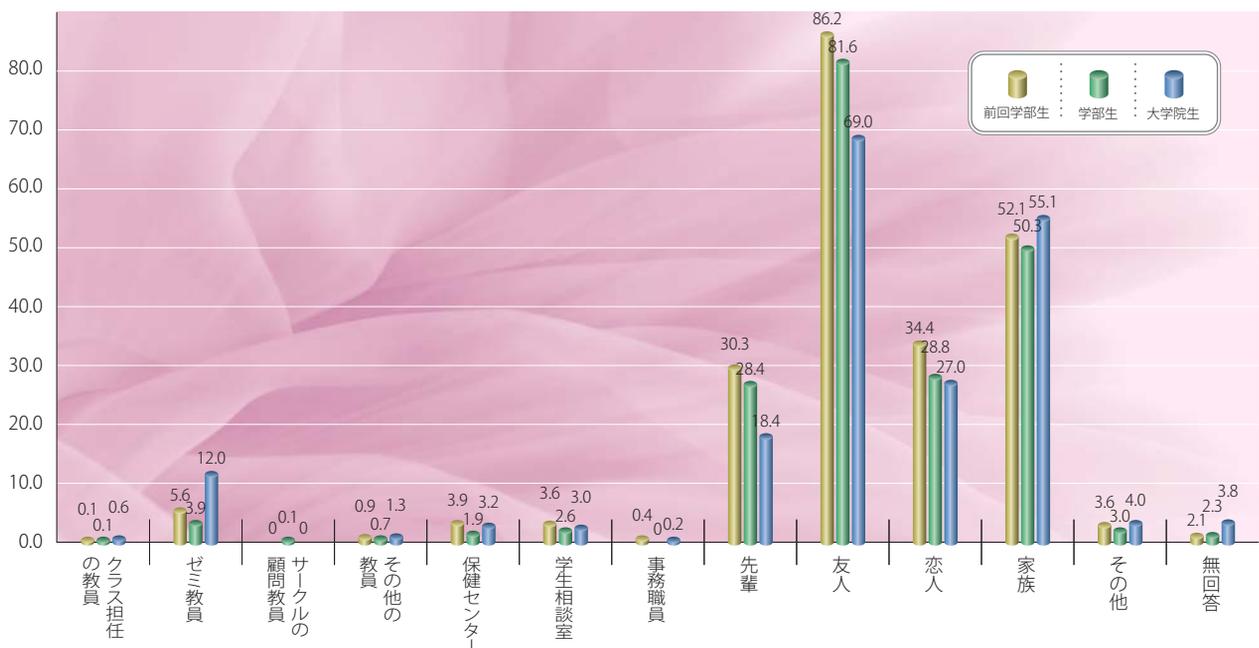
(単位：%)



相談を持ちかける相手としては、友人(学部生 81.6%, 大学院生 69.0%)、家族(学部生 50.3%, 大学院生 55.1%)、恋人(学部生 28.8%, 大学院生 27.0%)、先輩(学部生 28.4%, 大学院生 18.4%)が多くなっています。教員や学内相談機関よりも個人的に親しい人に相談をする傾向があります。また、前回調査と比べ、ほとんど全ての項目で値が下がっていることから、相談しに行くことができる選択肢が減ってきていることが伺えます(図表Ⅷ-3 参照)。

図表Ⅷ-3 相談しやすい人

(単位：%)

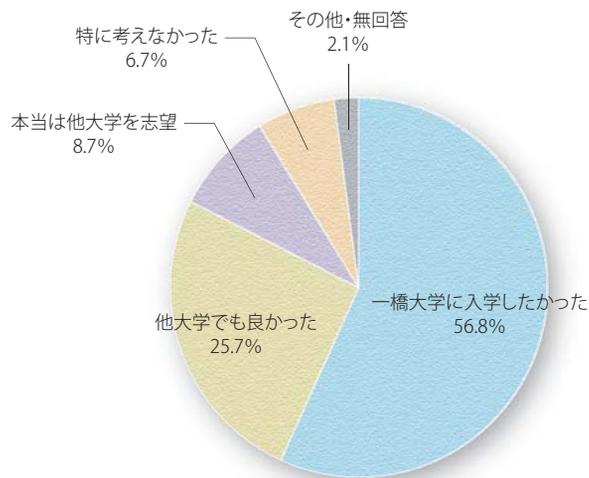


IX

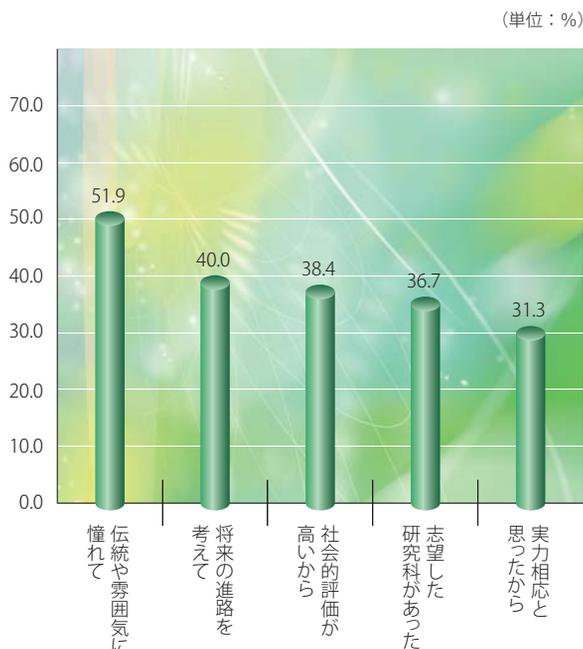
入学について

一橋大学への入学については、約6割が〈一橋大学に入学したかった〉と答えており、その割合は学部生・大学院生ともあまり変わりありません(図表IX-1参照)。入学動機(最大3つまで選択)としては、学部生では〈伝統や雰囲気は慣れて〉という回答が5割以上と最も多く、〈将来の進路を考えて〉〈社会的評価が高いから〉〈志望した研究科があった〉がそれぞれ3割以上の支持を得ています(図表IX-2参照)。一方、大学院生については〈志望研究科〉の69.4%が圧倒的に高く、他に3割以上の回答を得ているのは〈環境・設備が優れている〉の39.7%のみです(図表IX-3参照)。

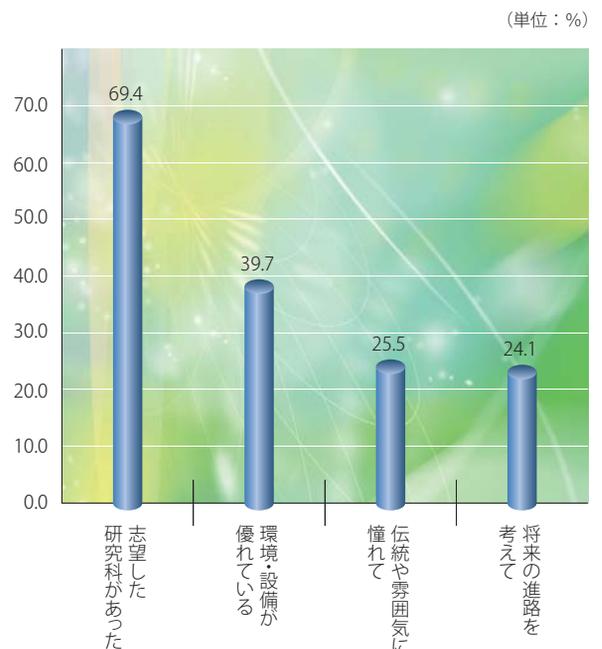
図表IX-1 本学への入学希望の強さ(学部生+大学院生)



図表IX-2 入学志望動機(学部生)



図表IX-3 入学志望動機(大学院生)

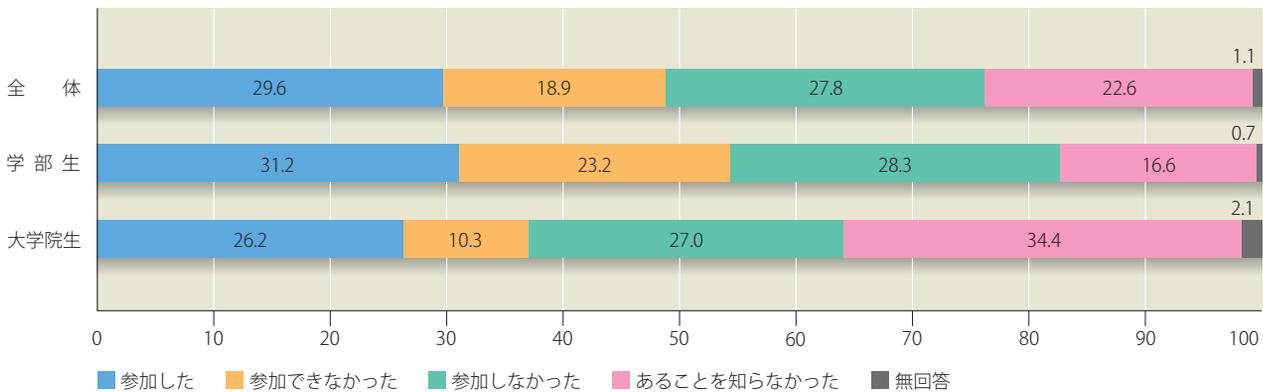




オープンキャンパス・入試説明会については、全体で3割、大学院生の1/4が参加しており、その結果〈志望意欲が高まった〉という回答がそれぞれ58.8%、41.1%であることを考えると、これらの行事はそれなりの成果を挙げているといえます（図表IX-4 参照）。学部生・大学院生全体では、〈キャンパスの雰囲気を知ることができた〉が58%、〈学部を知ることができた〉が42.2%と高いのに対し、大学院生については〈研究科を知ることができた〉が54.8%、〈教員等を知ることができた〉が46.8%となっており、大学院生の勉強・研究の重視傾向が見て取れます（図表IX-5 参照）。

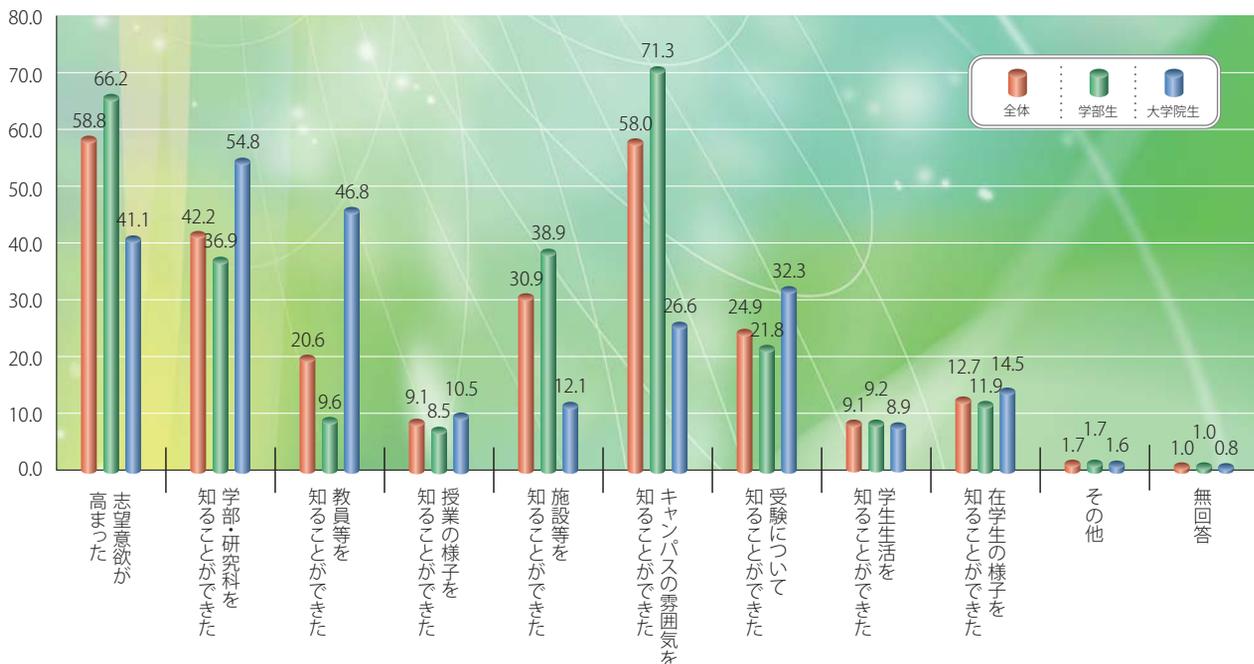
図表IX-4 オープンキャンパス・説明会への参加

(単位：%)



図表IX-5 オープンキャンパス等に参加して役立ったこと

(単位：%)



X

学生生活について

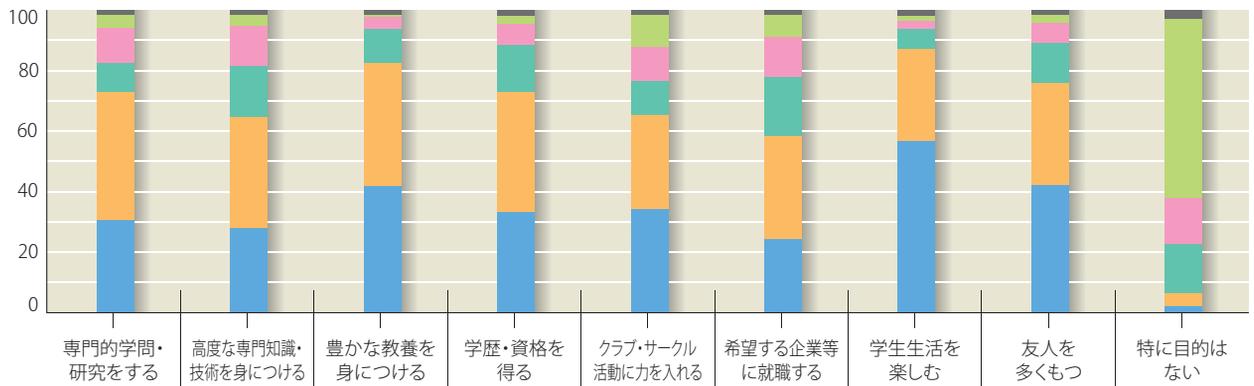
大学に〈行きたい・楽しみ〉〈どちらかといえば行きたい〉と答えている学生は、76.5%です。1週間に大学に来る回数の平均は、学部生・大学院生とも4.5回程度で、学部生は6割以上の回答が4回・5回に集中しています。大学院生はもう少し散らばりが大きく、院生研究室で研究を行うグループと、家で行うグループに大きく分かれています。

大学生活の目的としては、学部生の8割以上が〈豊かな教養を身につける〉〈学生生活を楽しむ〉を、〈あてはまる〉〈ややあてはまる〉と回答しています。〈友人を多く持つ〉〈学歴・資格を得る〉〈専門的学問・研究をする〉の順番で、それに続きます(図表X-1 参照)。一方、大学院生では、〈専門的学問・研究をする〉〈高度な専門知識・技術を身につける〉の二つが突出しています(図表X-2 参照)。

学生生活全般に感ずる満足度は〈満足している〉〈まあ満足している〉を合わせて、85.2%とかなり高くなっています。内訳としては学部生(87.4%)、大学院生(80.8%)となっており、学部生の方が大学に対する満足度が若干高くなっています。

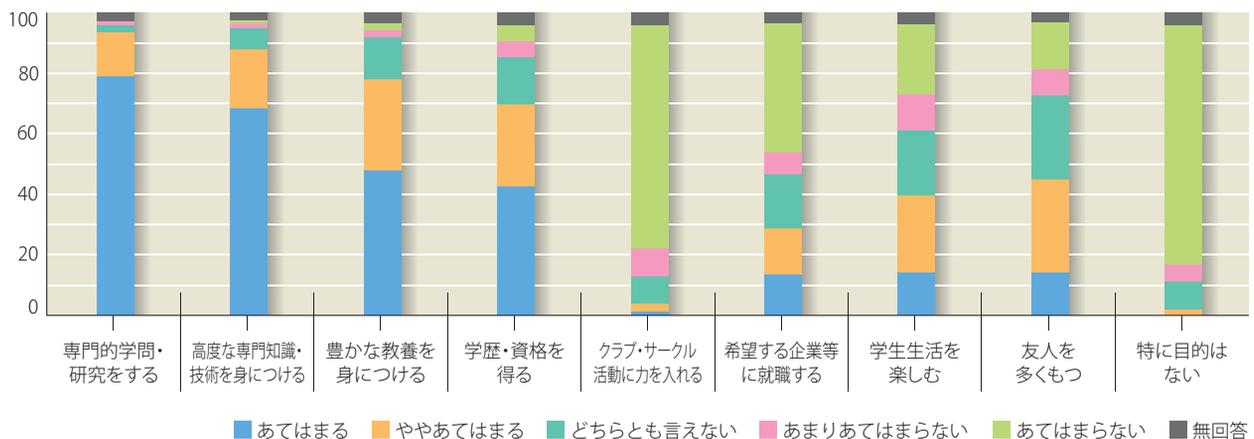
図表 X-1 学生生活の目的(学部生)

(単位：%)



図表 X-2 学生生活の目的(大学院生)

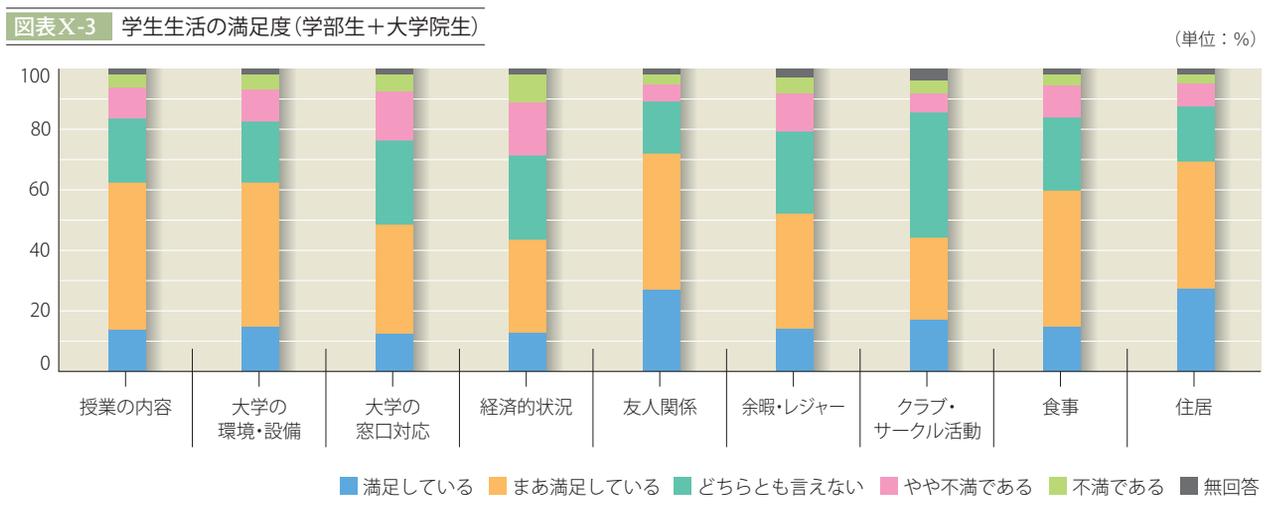
(単位：%)



個別の項目に関する満足度については、最も比較的高いのが〈友人関係〉〈住居〉で、7割前後の学生が〈まあ満足している〉以上の回答をしています。前回(平成17年度)の調査と比較して特に変化が著しい項目として、〈大学の窓口対応〉については、〈まあ満足している〉以上の回答が22.5%から50%近くへと増加しており、逆に〈やや不満〉以下は45.8%から21.1%へと大きく低下していることとあわせて、大きな改善があったこと



がわかります。一方、〈余暇・レジャー〉〈クラブ・サークル活動〉に関する回答は、不満はさほど増えていないものの、満足だと回答している学生の割合は大きく減少しています(図表X-3 参照)。

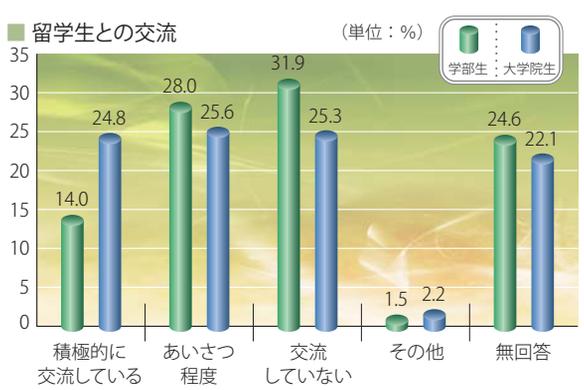


大学に対する愛着では、一橋大学全体に対する愛着は学部生が〈感じる〉〈まあ感じる〉が87.7%なのに対し、大学院生は75.3%と、学部生の愛着心の方が大きく上回っていますが、自分の学部・研究科への愛着については学部生が63.7%、大学院生が68.7%とほぼ変わりがないか、若干、大学院生のほうが高めになっています。

ゼミに関しては大学院生が63.7%、学部生が37.1%となっていますが、これはゼミに所属していない1・2年生が多いことを反映しています。部活やサークルでは、学部生は71.2%と学部への愛着よりも高くなっていますが、大学院生は9.3%で、所属していない・無回答が68.3%を占めます。

大学での友人関係では学部生の63.5%が〈友人・親友がいる〉と回答しているのに対し、大学院生は45.1%に留まっており、留学生に関しても同様の傾向がみられます。生活のリズムに関しては、全体的に似通った傾向にあり、3割強が〈規則正しい〉と答えており、残りの6割強が〈やや不規則〉〈かなり不規則〉と回答しています。

また今回のアンケートでは、ボランティア活動への参加状況や、留学生との交流に関する質問を設けてあります。ボランティア活動については、大学主催のキャンパス美化活動が多い〈環境美化〉の経験者が15%以上いる他はほぼ、すべての項目で10%以下であり、この他に無回答が約60%いることも考え合わせると、本学の学生のボランティア活動は、まだまだ盛り盛んとは言えません。留学生との交流に関しては、学部生と大学院生の間で回答に大きな違いがあります(図表X-4 参照)。



I 回答学生について
II 家庭の状況について
III 生活費の状況について
IV 通学・住居について
V 経済支援について
VI アルバイトについて
VII 進路・就職について
VIII 生活支援について
IX 入学について
X 学生生活について
XI 大学への愛着について

XI

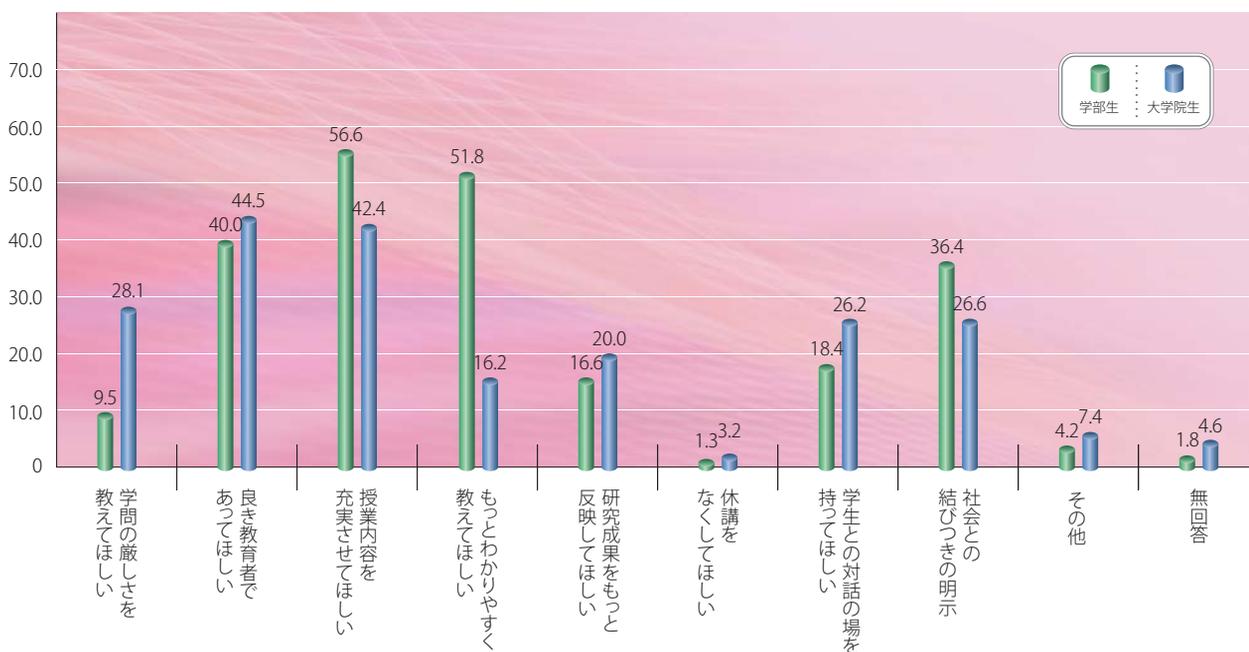
大学への要望等について

回答学生のうち44.3%は、一橋大学で行われている学生支援を総合的に見て〈適切である〉あるいは〈ほぼ適切である〉と評価しています(前回調査では32.2%)。他方、〈あまり適切ではない〉あるいは〈不適切である〉と考えている学生の比率は10.7%にとどまっています(前回調査では18.8%)。前回の調査(平成17年度)と違って、今回の調査は大学院生も対象に含めていますが、学部生と大学院生の間、学生支援に対する評価の違いはほとんど見られません。したがって、前回調査と比べて、学生支援に対する学生の評価は顕著に高まっていると言えます。しかし、学生支援全体をあまり高く評価しない学生がなお1割程度いることを真摯に受け止め、学生支援の一層の改善と拡充を図る必要があります。

一橋大学生が教員に期待すること(3つまで選択)については、学部生と大学院生の間で明瞭な違いが見られます。学部生では〈授業内容を充実させてほしい〉という回答が最も多く(56.6%)、〈もっとわかりやすく教えてほしい〉(51.8%)、〈良き教育者であってほしい〉(40.0%)がそれに続きます。それに対して、大学院生では〈良き教育者であってほしい〉という要望が第一であり(44.5%)、次いで〈授業内容を充実させてほしい〉(42.4%)、〈学問の厳しさを教えてほしい〉(28.1%)という順になります。また、大学院生の自由回答には〈良き研究者であると同時に良き教育者であってほしい〉というものが目立ちます。研究と教育のバランスの取れた発展が求められます(図表XI-1参照)。

図表XI-1 教員へ期待すること

(単位：%)

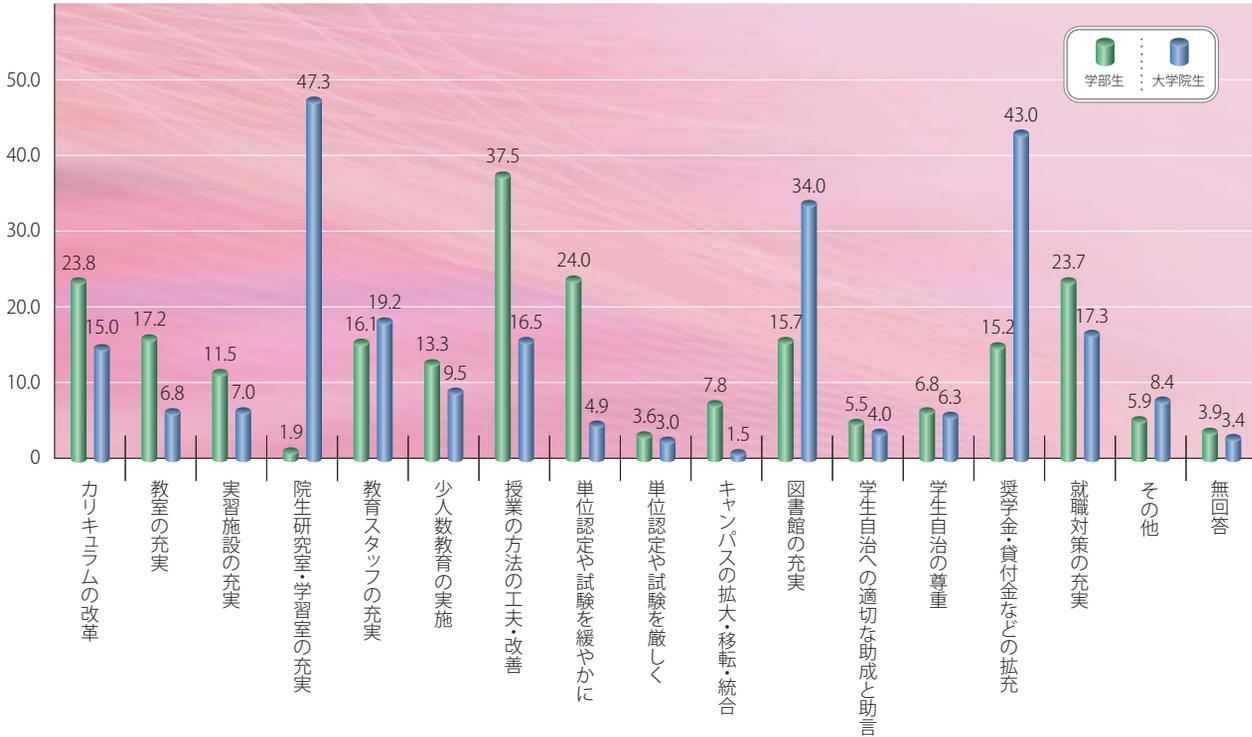


大学に特に要望ないし期待すること(3つまで選択)も、学部生と大学院生とで大きく異なります。学部生が最も強く望むのは〈授業の方法の工夫・改善〉(37.5%)であり、〈カリキュラムの改革〉(23.8%)や〈就職対策の充実〉(23.7%)も上位に入っています。他方、大学院生の第一の要望は〈院生研究室・学習室の充実〉(47.3%)であり、次いで〈奨学金・貸付金などの拡充〉(43.0%)、〈図書館の充実〉(34.0%)であり、研究環境の充実が求められています(図表XI-2参照)。



図表 XI-2 大学への要望

(単位：%)



「一橋大学の良さ」について自由な意見を求めたところ、約 900 件の回答がありました。学部生・大学院生ともに、自由な校風や、学生の自主性が重視されていることを評価する回答が最も多く(160 件以上)、静かで落ち着いた環境、キャンパスの美しさ、少人数教育、学部間の壁がないこと、小規模で学生間および学生と教員の距離が近いこと、教員と学生の質が高いことなども、多くの学生から本学の良さとして挙げられました。

「一橋大学に言いたいこと」としては、約 700 件の意見や要望が寄せられました。学生からの個別の要求は実にさまざま、相反する意見も見られますが、全体として、学習・学生生活のための施設の改善と、カリキュラム・授業内容の充実、事務窓口における対応の改善が、とくに求められているようです。大学院生からは、研究・生活・就職支援の充実(とくに院生研究室と図書館)への要望が強く出されています。今後、このような意見を集約し、きちんと対処し、また学生に十分な説明と情報提供を行う必要があるでしょう。

最後に「本調査に対する意見」を求め、約 400 件の回答がありました。調査の実施そのものに対しては好意的な意見が多いのですが、前回調査に続いて、質問の多さ(質問票の長さ)が多くの学生から指摘されました。調査方法については、電子メールやウェブを使った調査が提案されました。さらに、調査を継続して行うこと、そして調査結果を報告書にまとめるだけでなく、学生生活や教育環境の改善に活かすことが求められています。

多くの学生から寄せられたこれらの貴重な意見や提言については、その内容を真摯に受け止め、今後の対応を考えていきたいと思えます。

I 回答学生について

II 家庭の状況について

III 生活費の状況について

IV 通学・住居について

V 経済支援について

VI アルバイトについて

VII 進路・就職について

VIII 生活支援について

IX 入学について

X 学生生活について

XI 大入の要望について





平成19年度 一橋大学学生生活実態調査報告書

平成21年3月発行

編集 一橋大学学生委員会

委員長 盛 誠吾(理事 教育・学生担当副学長)

副委員長 中野 聡(役員補佐 教育・学生担当)

委員 岡室 博之(経済学部・経済学研究科)

沖野 眞己(法学部・法学研究科)

貴堂 嘉之(社会学部・社会学研究科)

山本 和彦(大学院教育専門委員会)

祝迫 得夫(大学院教育専門委員会)

高尾 隆(学生支援センター・学生相談室)

発行 一橋大学学務部学生支援課

〒186-8601 国立市中2-1